

京都府埋蔵文化財情報

第 65 号

須恵器・直口甕の基礎的検討-----	小池 寛-----	1
竪穴式住居内に煙道を有するカマドについて —浦入遺跡における調査事例から—	筒井 崇史・榎本 順子-----	10
内里八丁遺跡第9次の発掘調査-----	森下 衛-----	18
—平成9年度発掘調査略報—-----		25
1. 芋野城跡	4. 長岡京跡左京第400次(7ANEMR-4地区)	
2. 相之目古墳		
3. 中海道遺跡第46次		
研修だより 平成7年度全埋協近畿ブロック海外研修報告-----		32
誌上遺物展示 2. 桑飼下遺跡の打製石斧-----		38
府内遺跡紹介 79. 天塚古墳-----		41
長岡京跡調査だより・62-----		43
センターの動向-----		46
受贈図書一覧-----		48

1997年 9月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

須恵器・直口甕の基礎的検討

小池 寛

1. はじめに

須恵器の大規模な生産拠点である陶邑古窯址群の発掘調査は、1961年に大阪府教育委員会が実施して以降、膨大な調査件数に及んでいる。特に、平安学園考古学クラブが刊行した『陶邑古窯址群』Iは、現在、一般的に使用される須恵器編年の基本であり、その後刊行された陶邑古窯址群の調査報告書^(注1)についても、須恵器研究を行う上での基本的文献として多用されている。

表題にあげた「須恵器・直口甕」は、その器形名称が示すように口頸部が直口する甕を示す。直口甕自体は、平安学園考古学クラブ刊行の『陶邑古窯址群』Iに既に見られるが、それ以降、器形名称の使用は減少し、報告書によっては「直口壺・短頸壺」として分類されることがある。

本稿ではまず、陶邑古窯址群における直口甕の様相を整理し、口頸部の形態と類例は僅かではあるが、肩部に付された耳の形態を中心に分類を行う。さらに、陶邑古窯址群以外の類例についても数例の出土事例を検討し、形態的特徴と用途について検討することを目的としている。また、肩部に付された耳の形態変化を整理することにより、提瓶・直口甕の耳の型式変化が、従来より支持されてきたように環状から角状、そして、瘤状に至るか否かについての私見も提示したい。

なお、直口甕の祖型には、後述するように古式土師器ないしは朝鮮半島の陶質土器が候補としてあげられるが、現時点では十分検討できていないため、ここでは概観にとどめ、別稿により再検討したいと考えている。

2. 陶邑古窯址群における直口甕の検討

陶邑古窯址群の中であって直口甕が出土した窯址は、現時点では27窯址を数え、出土点数は34例^(注2)を数える。これは、口頸部が外反する通有の甕の出土点数と比較すれば、圧倒的に僅少であり、直口甕が特異な器形であったことを示している。

『陶邑古窯址群』Iにおける甕の分類は、器形別消長表においては、大型甕・小型甕の2種類に分類しているが、遺物の観察表においては、直口甕・中型甕・大型甕の3種類に分類している。通有に見られる外反する口頸部をもつ甕は、中型甕が口径20～25cm、大型甕が口径60cm前後の法量を分類基準としている。一方、TK217号窯址から出土した直口甕については、「短く直立する口縁をもつ。口端面はわずかに内傾し、端面の両はしは稜をなす。口頸部には沈線または凹線を1～2条めぐらしている。体部は肩の張りだしが極めて少なく、体部のふくらみはごくわずかである」という形態の特徴を記載している。また、同窯址から出土している大型甕の備考欄には、

「直口の大甕あり」との記載があり、TK208号窯址から出土した中型甕の備考欄にも「直口甕も数例あり」との記載がある。このことから通有に見られる甕と直口甕は、形態の上からも明らかに区別されていることがわかる。

a. 直口甕の分類について

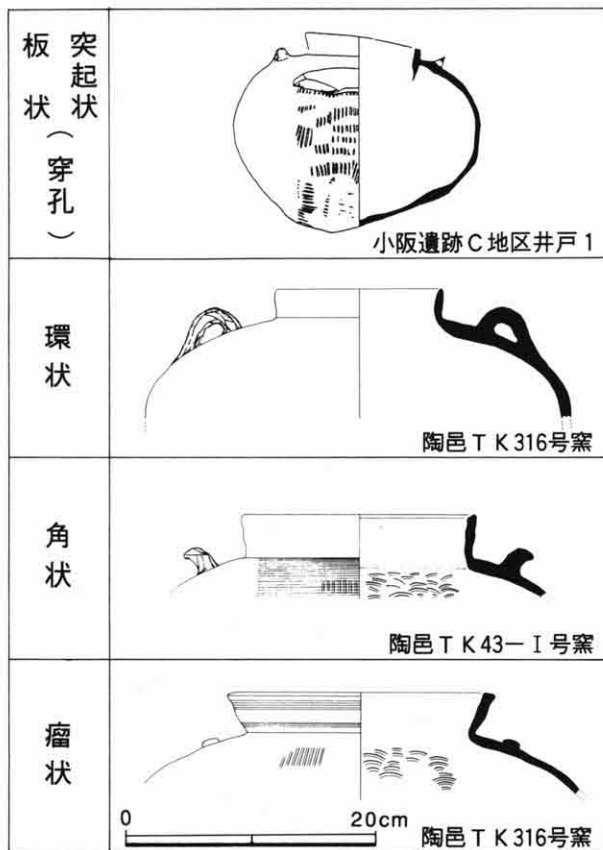
先述したように、『陶邑古窯址群』Iでは、短く直立する口頸部をもつ甕を直口甕としているが、短いと規定する具体的な法量が提示されていないことから、集成作業を通して便宜的に口頸部の高さが3cm以上の個体をa類、3cm以下の個体をb類に分類した。また、a類においても、内彎する口頸部をもつ個体をa1類、直立する口頸部をもつ個体をa2類、外上方に直線的にのびる口頸部をもつ個体をa3類に細分した。一方、b類は、直立する口頸部と体部の境界が不明瞭で、肩部の張らない個体をb1類、直立する口頸部と体部の境界が比較的明瞭で、肩部の張る個体をb2類に分類した。また、肩部の耳は、板状及び突起状の耳の基部を穿孔する耳・環状の耳・角状の耳・瘤状の耳の4類(第1図)に分類した。

b. 直口甕の概観(第2図、付表)

TK73よりも先行する伏尾・大庭寺遺跡においては、大庭寺遺跡393-OL^(注3)においてa3類に分類できる個体が出土しており、同56-ORにおいてもa3類に分類できる個体が出土している。一方、TK73併行期に比定できるTK85号窯址ではa2類の直口甕が出土しており、TK216併行のTK87号窯址からはa1類が出土している。また、TK208号窯址からもa1類、同じくTK208併

行に比定できるTK36号窯址からはa2類・b1類、MT230-I号窯址からはa2類の直口甕が出土している。TK36号窯址から出土した大型の直口甕を除けば、口径は15~20cm前後であり、中型甕の範疇に捉えられる。一方、TK23併行期のTK67・TG207・TG43-II号窯址及びTK47に併行するTG225号窯址からはa2類の直口甕が出土している。これらは、肩部が残存しておらず、耳の有無については不明であるが、角状の耳が付く類例としては、TK10併行期に比定できるTK74号窯址のa2類の個体がある。

一方、6世紀後半から7世紀初頭にかけての類例としては、TK209に併行するTG40-I・TK43-I号窯址ではa2類、KM28-I・TN28号窯址ではb1類、TG32号窯址ではb2類の直口甕が出土



第1図 耳の分類

している。特に、TK43-I号窯址では角状の耳が付けられている。また、TK217号窯址からはa2類、TK217併行期のKM115号窯址からはa2・a3類、KM234号窯址からはa3類の直口甕が出土しており、KM115号窯址から出土したa2類の個体には環状の耳が付いている。これらはほとんどが中型甕の法量であり、大型の直口甕は、現時点では見られない。MT21併行期以降に比定できるTK316号窯址では、環状の耳と瘤状の耳が共伴しており、耳の型式変化を考える上で重要な資料である。

以上が陶邑古窯址群における直口甕の概観であるが、直口甕は、TK73併行期以前の大庭寺遺跡においても類例があり、須恵器生産が開始される段階から甕の種類の中にとり込まれていたことがわかる。また、TK73～TK208併行期前後にはa1類が散見できるものの、それ以後には見られず、TK208～TK217併行期ではa2類が比較的多く見られる傾向がある。一方、TK217併行期以降では、類例が僅かではあるがa3類を確認することができる。

また、b類は、須恵器生産開始時期にまで遡る個体は、陶邑古窯址群では確認できないが、大阪府堺市小阪遺跡C地区井戸1(注4)からTK73併行期前後に比定できる類例が出土している。その資料は、b2類に分類でき、突起状の耳の基部を穿孔している。この個体から、TK73併行期前後には直口甕としての器形が成立していることが確認できた。

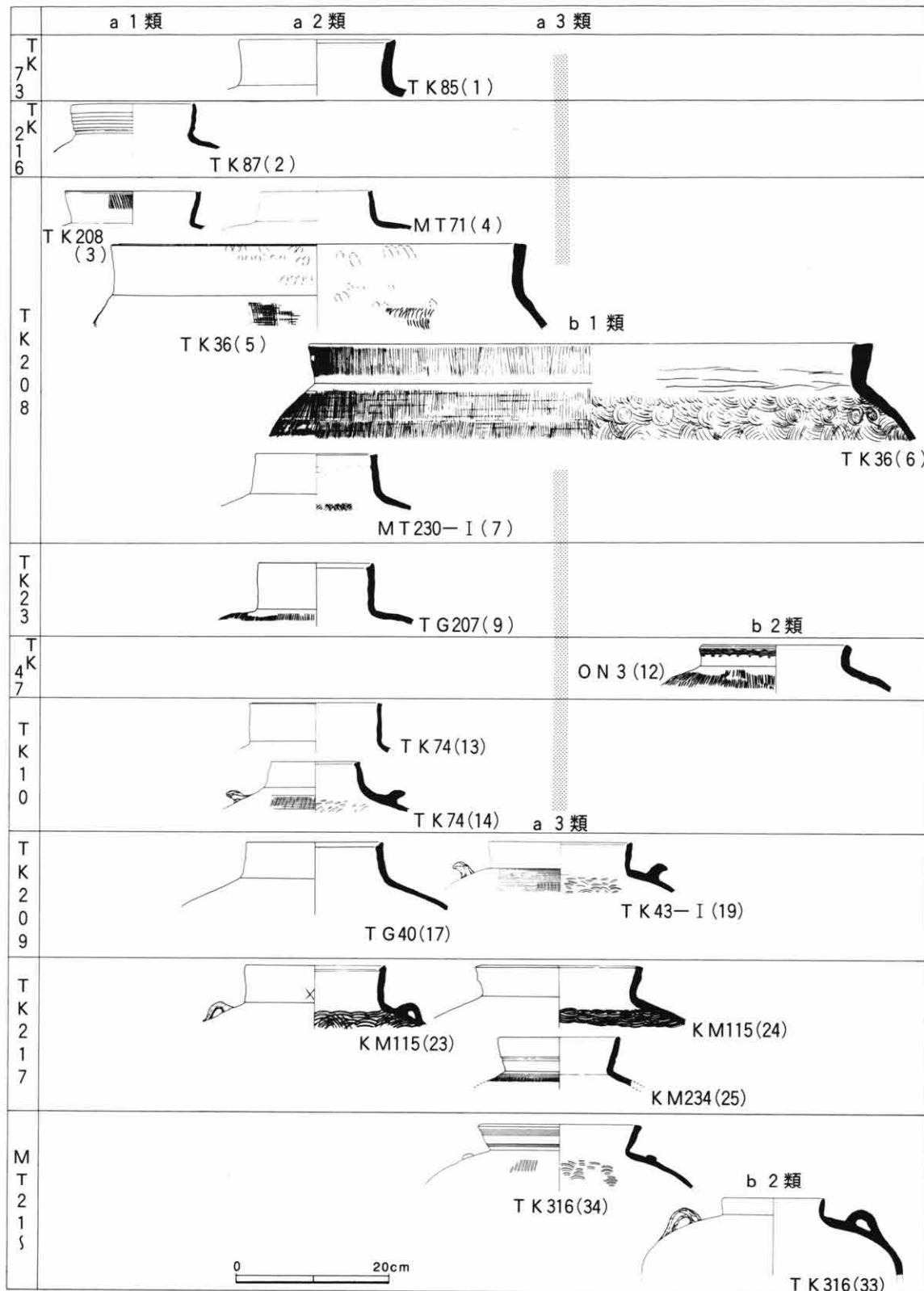
3. 直口甕の系譜

先述したように直口甕は、口頸部の形態的特徴から5類、耳の形態から4類に分類することができた。また、各分類によって出現期に前後関係が見られることが判明した。ここでは、その出現した背景について、諸類例から復原しておきたい。なお、直口甕の系譜については、現時点では、十分、検討できておらず、可能性の指摘も含め、概観しておきたい。(注5)

a1類 内彎する口頸部をもつa1類は、いわゆる、初期須恵器にみられる特徴である。須恵器の出現期については、大庭寺遺跡の調査や朝鮮半島の加耶・百済の調査事例の増加によって、5世紀初頭を中心とする時期設定が徐々に定着しつつある。しかし、須恵器生産がどのように受け入れられたかについての歴史的背景の解釈は、畿内政権との密接な関連なども考慮する必要があり、必ずしも統一的な見解が得られている訳ではない。

大庭寺遺跡から出土する初期須恵器には、朝鮮半島・加耶の特徴をもつ器形とともに百済の特徴をもつ器形も散見できることから、基本的には外来器形が中心になり、初期須恵器生産が開始されたことが理解できる。しかし、二重口縁の壺などは、古式土師器に祖型を求めべき器形であり、伝統的な器形が須恵器生産時に採り入れられた状況がうかがわれる。このように、土師器は、須恵器の生産開始とともに、大きく変貌し、煮炊具を中心に生産されるようになるが、他方、須恵器は、実に多様な器形が生産され、機能によつての分化が一層進行するのである。そのような状況の中でa1類の直口甕を捉えれば、布留式甕の口頸部に近似しており、伝統的に生産された古式土師器が祖型となっている可能性を指摘しておきたい。

a2類 直立する口頸部をもつa2類は、TK85号窯址出土例のように初源期の須恵器に既に見



第2図 直口甕の分類私案(付番は付表と一致している)

られる器形である。先述したように、須恵器生産における朝鮮半島の陶質土器の及ぼした影響は、器形ごとに加耶・百済の影響が論じられる段階に至っている。a2類の形態的特徴を念頭に置き、陶質土器を通観した場合、慶州市鷄林路52号墳出土の三耳壺と酷似する類例としてあげることができる。おそらく、a2類の祖型は、洛東江流域の陶質土器にもとめて大過ないであろう。なお、陶邑古窯址群では、TK208～TK217併行期においてa2類が比較的多く見られる傾向があるが、陶質土器の影響が、初源期の須恵器のみに影響を与えたばかりではなく、それ以後も器形的な影響を与えたことを示唆するものと解釈しておきたい。

a3類 外上方に直線的にのびる口頸部をもつa3類は、大庭寺遺跡393-O Lや同56-O R、大阪府南河内郡河南町に所在する一須賀2号窯などの初源期の須恵器窯址に類例が見られることから、a2類同様、朝鮮半島の陶質土器に祖

型を求めることができる。類例としてはやや時期が異なるが全羅北道高敞郡高敞邑新月里出土の広口壺などがあり、また、平安南道大同郡栗里面松薪里古井戸出土の双耳壺なども知られている。おそらく、高句麗起源の双耳壺が高句麗の南下とともに百済の地に至り、工人の渡来により、須恵器の一器形として採用された歴史的背景を復原できる。なお、陶邑古窯址群においては、TK209併行期以降にa3類を確認することができるが、それ以前においても既に、器形として採用されている可能性が陶邑古窯址群以外の事例によっても確認されている。

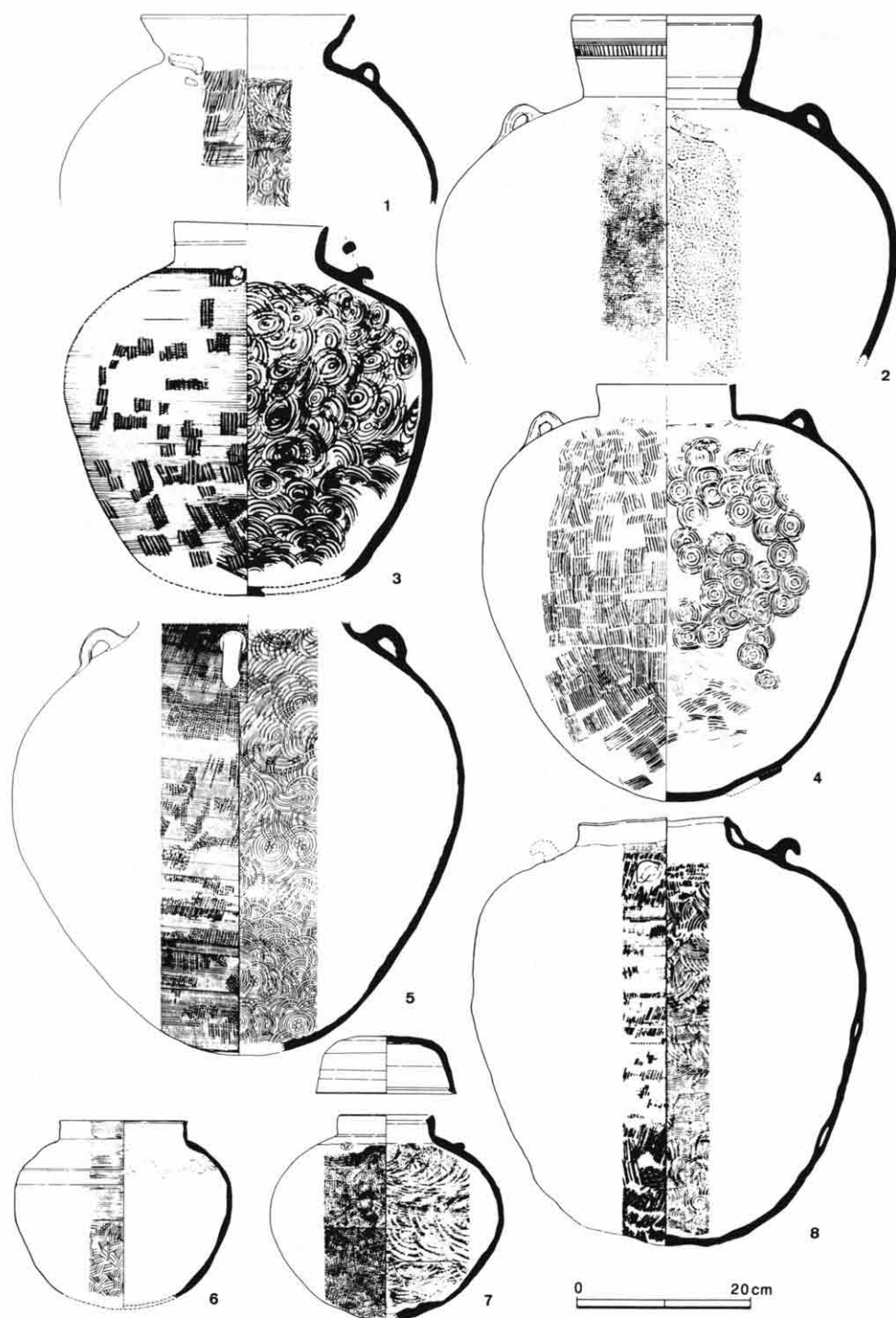
一方、b類の祖型としては、朝鮮半島の初期鉄器時代に比定されるソウル市可樂洞2号墳出土の黒色磨研土器の壺があり、それ以後では、慶州市皇吾洞出土の雙耳壺などがある。しかし、形態的には近似するものの、時期差があるため直接的な関係については言及できないのが現状である。可能性としては、a2類の形骸化した形態として把握する必要もあろう。

4. 直口甕の消費地における事例

陶邑古窯址群における直口甕について

付表 直口甕集成表(陶邑古窯址群)

番号	窯址名	型式	口径	口頸部高	耳	型式分類	文献
1	TK85	TK73	20.0	6.1	-	a2	注4
2	TK87	TK216	16.0	4.0	-	a1	注4
3	TK208	TK208	17.7	4.0	-	a1	注1
4	MT71	TK208	14.3	5.1	-	a2	注6
5	TK36	TK208	48.4	3.2	-	a2	注5
6	TK36	TK208	54.4	6.8	-	b1	注5
7	MT230-I	TK208	15.6	5.2	-	a2	注5
8	TK67	TK23	16.0	5.3	-	a2	注4
9	TG207	TK23	14.0	5.8	-	a2	注3
10	TG43-II	TK23	14.9	5.1	-	a2	注3
11	TG225	TK47	12.7	4.4	-	a2	注3
12	ON3	TK47	18.8	2.8	-	b2	注4
13	TK74	TK10	22.8	6.8	-	a2	注6
14	TK74	TK10	17.1	5.0	角状	a2	注6
15	TK230-II	TK43	20.0	3.2	-	a2	注5
16	KM28-I	TK209	14.2	1.6	-	b1	注2
17	TG40-I	TK209	17.0	4.5	-	a2	注3
18	TG32	TK209	15.5	2.4	-	b2	注3
19	TK43-I	TK209	18.5	3.4	角状	a3	注6
20	TN28	TK209	21.2	2.8	-	b1	注7
21	TK217	TK217	38.6	4.0	-	a2	注1
22	TK217	TK217	16.1	4.0	-	a2	注1
23	KM115	TK217	20.4	4.4	環状	a2	注2
24	KM115	TK217	18.0	5.0	-	a3	注2
25	KM234	TK217	15.4	4.4	-	a3	注2
26	TG55	MT21以降	16.6	3.4	-	a2	注3
27	TG55	MT21以降	24.0	4.8	-	a3	注3
28	TG55	MT21以降	39.0	4.9	-	b1	注3
29	TG77	MT21以降	15.2	5.6	-	a2	注3
30	TK304	MT21以降	29.4	5.2	-	a2	注5
31	TK304	MT21以降	18.4	4.4	-	a2	注5
32	TK304	MT21以降	28.6	5.0	-	a2	注5
33	TK316	MT21以降	13.2	2.1	環状	b2	注6
34	TK316	MT21以降	21.0	3.3	瘤状	a3	注6
35	TK315	MT21以降	19.8	2.5	-	b2	注6



第3図 直口甕集成

- 1. 広島県助平2号遺跡 S2-22
- 4. 京都府今林2号墳
- 7. 広島県法恩地南古墳

- 2. 岡山県川戸3号墳
- 5. 徳島県柿谷遺跡 S K1002
- 8. 兵庫県奈良山7号墳

- 3. 京都府細谷9号墳
- 6. 福岡県池の上6号墳

は、第2図及び付表の通りであるが、消費地から出土した8例について、簡単に概観しておきたい(第3図)。

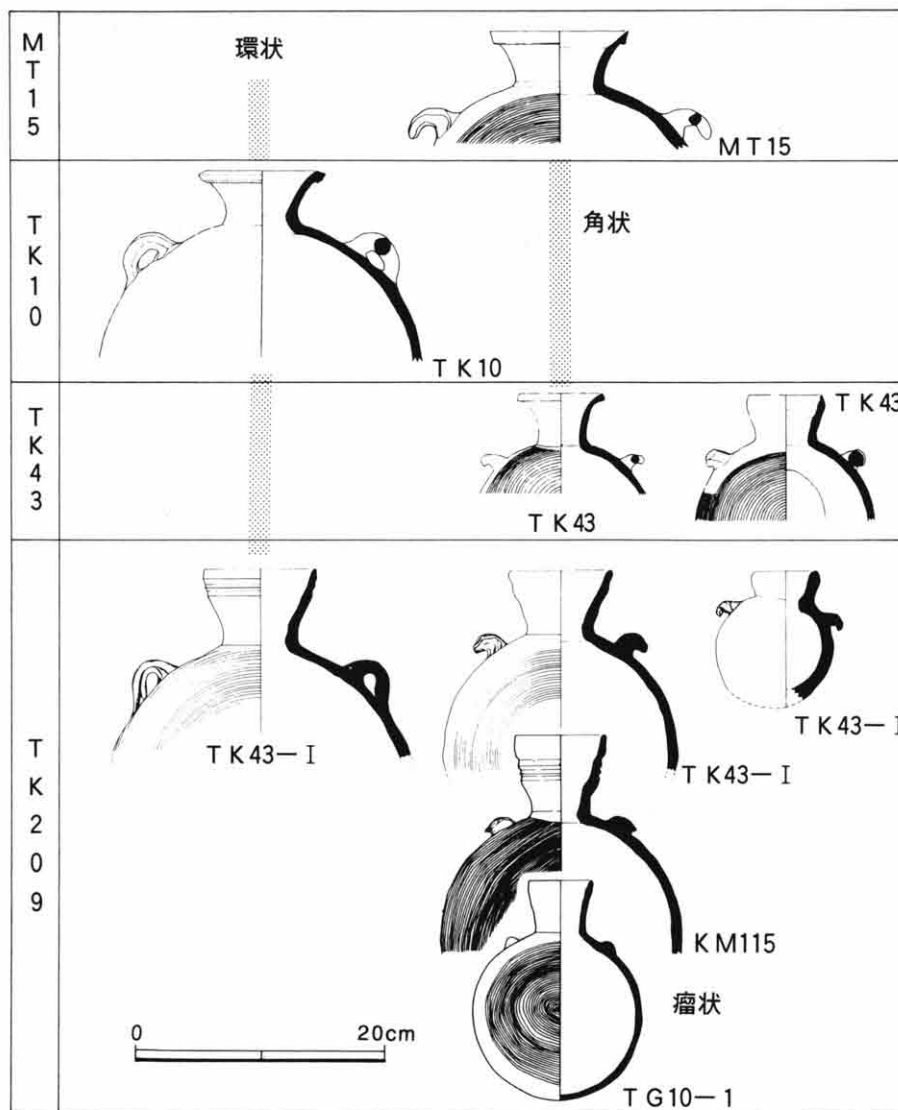
1は、広島県東広島市に所在する助平2号遺跡^(注6)から出土した直口甕である。共伴する須恵器から概ね7世紀後半から8世紀前半に比定できる。陶邑古窯址群TK316号窯址出土例(第2図34)と共通する口縁部の形態を有しており、肩部に環状の耳が付く。2は、岡山県大原町に所在する川戸3号墳^(注7)から出土した直口甕である。共伴遺物からTK217併行期に比定できる。肩部に環状の耳が付く。3は、京都府綾部市に所在する細谷9号墳^(注8)から出土した直口甕である。共伴する須恵器から概ねTK209併行期に比定できる。体部外面に須恵器片が多数溶着しており、在地の須恵器窯址で生産された可能性が高い。4は、京都府園部町に所在する今林2号墳^(注9)から出土した直口甕である。共伴する須恵器から概ねTK47併行期に比定でき、肩部に環状の耳が付く。5は、徳島県板野郡上板町に所在する柿谷遺跡^(注10)から出土した直口甕である。口縁部を欠いているが、共伴する須恵器から概ねTK43併行期に比定でき、肩部に環状の耳が付く。6は、福岡県甘木市に所在する池の上6号墳^(注11)から出土した直口甕である。陶質土器か初源期の須恵器であるかについては、判然としない。本類例については別稿において検討したい。7は、広島県高田郡甲田町に所在する法恩地南古墳^(注12)から出土した直口甕である。共伴する須恵器から概ねTK209併行期に比定できる。本資料は、蓋が共伴して出土していることから、他の直口甕にも、元来、蓋が伴っていたことを示している。また、肩部の耳が形骸化しているにも係わらず、蓋を伴っていることから、肩部の耳は、蓋を固定する用途があったことを示唆している。8は、兵庫県三田市に所在する奈良山7号墳^(注13)から出土した直口甕である。共伴する須恵器から概ねTK209併行期に比定できる。口縁部が歪み、焼け膨れしていることから、在地の須恵器窯址で生産されたのであろうか。

以上のように、僅かな例ではあるが、古墳からの出土例が多い点が指摘できる。朝鮮半島・陶質土器の直口の甕・壺は、墳墓から出土する事例が多く、葬送と密接な関係があったことが理解されるが、須恵器の生産段階においても陶質土器の用途が踏襲され、さらに、古墳時代終末期に至っても、葬送及びそれに類する宗教的行為と関連する器形として認識されていたことがうかがわれる。

5. 提瓶および直口甕の耳についての型式変化に対する私見(第4図)

考古学の最も重要な方法論である型式学を学習する際に、その典型的な事例として提瓶の耳の形骸化が図示されることが多い。その形骸化については、一定の検証がなされたように考えられてきたが、今回、取り上げた直口甕の類例を集成する作業の過程において、従前の見解のように環状から角状、そして、瘤状に至る型式変化が果たして正当であるかの疑問をもった。

陶邑古窯址群出土の直口甕を見た場合、環状の耳は、TK217併行期に初出するが、提瓶ではTK10併行期に見られることから、環状の耳は、提瓶の出現するMT15併行期には出現していることがわかる。一方、提瓶の角状の耳は、MT15併行期には見られ、少なくともTK209併行期まで継続して存在していることが直口甕の事例からも把握できる。しかし、瘤状の耳は、提瓶で



第4図 提瓶における耳の変化(陶邑古窯址群)

はTK209併行期、直口甕ではTK217併行期より以前には存在しないことが把握できており、角状の耳よりは遡らないことが確認できた。このことから、角状の耳が徐々に形骸化して瘤状の耳に変化したことについては首肯できる。しかし、環状の耳が角状の耳に変化したとする従前の見解については、MT21併行期以降に比定できる陶邑古窯址群TK316号窯址において、環状の耳をもつ個体と瘤状の耳をもつ個体が共伴している点や環状の粘土棒の下部を肩部から切り離し、角状の耳を成形する形骸化は、考えにくいことなどから首肯できる状況にはない。おそらく、環状の耳と角状の耳は、別系譜であり、ほぼ同時に須恵器に導入されたが、環状の耳は、形骸化することなく生産されたものの、角状の耳は、徐々に、瘤状の耳へと形骸化したのであろう。各々の系譜については、現時点では詳らかにできないが、別稿で検討したいと思う。

6. まとめ

直口甕の器形名称自体が使用されなくなる現状において、あえて、その集成を行い、存続期間

と消費地の事例について概観した。また、提瓶の耳も含め、従来から考えられてきた耳の型式変化についても私見を述べた。須恵器の編年的研究は、生産地と消費地の調査件数が増加し、概ね共通の認識として定着しているが、個々の器形について詳細に検討することにより、十分検討されてこなかった既成の概念についても再検討を促す機会になることを指摘し、別稿に続けたいと思う。

(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第4係調査員)

- 注1 『陶邑古窯址群』Ⅰ 平安学園考古学クラブ 1966、
『陶邑』Ⅰ (財)大阪文化財センター 1980、
『陶邑』Ⅱ (財)大阪文化財センター 1980、
『陶邑』Ⅲ (財)大阪文化財センター 1980、
『陶邑』Ⅳ (財)大阪文化財センター 1979、
『陶邑』Ⅴ (財)大阪文化財センター 1982、
『陶邑古窯址群』 和泉丘陵内遺跡調査会 1992。白石耕治氏のご教示を得た。
- 注2 一般的に入手できる報告書から該当資料の抽出を行った。
- 注3 『陶邑・大庭寺遺跡』Ⅲ (財)大阪府埋蔵文化財協会ほか 1993
- 注4 『小阪遺跡』 (財)大阪文化財センターほか 1992
- 注5 系譜については、現在、検討中であり、本稿では予察として記述した。
- 注6 『西条一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ 東広島市教育委員会 1993
- 注7 『川戸古墳群発掘調査報告書』 岡山県大原町教育委員会 1995
- 注8 「細谷古墳群第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第53冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注9 「今林2号墳・今林遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第68冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注10 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』10 徳島県教育委員会他 1994
- 注11 『池の上墳墓群』 甘木市教育委員会 1979
- 注12 『法恩地南古墳』 (財)広島県埋蔵文化財調査センター 1994
- 注13 『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』Ⅰ 兵庫県三田市教育委員会 1983

竪穴式住居内に煙道を有するカマドについて

— 浦入遺跡における調査事例から —

筒井崇史・楢本順子

1. はじめに

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府北部の舞鶴市に所在する浦入遺跡において、平成7年度より、関西電力株式会社の舞鶴火力発電所建設工事ともなう発掘調査を、舞鶴市教育委員会の委託を受けて実施しており、現在も継続中である。

平成8年度は、浦入遺跡N地点をはじめ、同B地点、浦入西2号墳などの調査を行った。特に、浦入遺跡N地点の調査では、従来、奈良時代から平安時代にかけての製塩遺跡と考えられてきた浦入遺跡において、縄文時代早期から後期にかけての遺物包含層や、弥生時代後期の遺物が多量に出土した流路状遺構、飛鳥時代前半期の集落などが確認された。また、奈良時代前半に位置づけられる製塩炉跡や、奈良時代から平安時代のテラス状遺構など、製塩作業に関わる遺構も多数検出された。テラス状遺構からは、細片化した製塩土器や支脚などが出土している。調査成果については年次報告を予定している^(注1)ので、詳細はそちらに譲ることにする。

小稿では、平成8年度に行った浦入遺跡N地点の調査で検出された竪穴式住居内に煙道を有するカマドについて、その概要と類例について簡単な報告を行う。

2. 竪穴式住居内に煙道を有するカマド



第1図 調査地位置図(1/25,000)

浦入遺跡N地点では、弥生時代から平安時代にかけての竪穴式住居跡もしくはテラス状遺構^(注2)を23基検出した。いずれも丘陵斜面の上位側を掘削して、下位側に盛り土することで、床面(あるいはテラス面)を形成している。このような立地環境のため、長い年月をかけて盛り土された床面部分が流失し、検出時は丘陵上位側のみが残存しているにすぎない。

小稿で報告する住居内に煙道を有するカマドは、竪穴式住居跡SH01で検出されたものであるが^(注3)、時期を明瞭に示す須恵器は出土していない。ただ、後述する類例から、おそらく飛鳥時

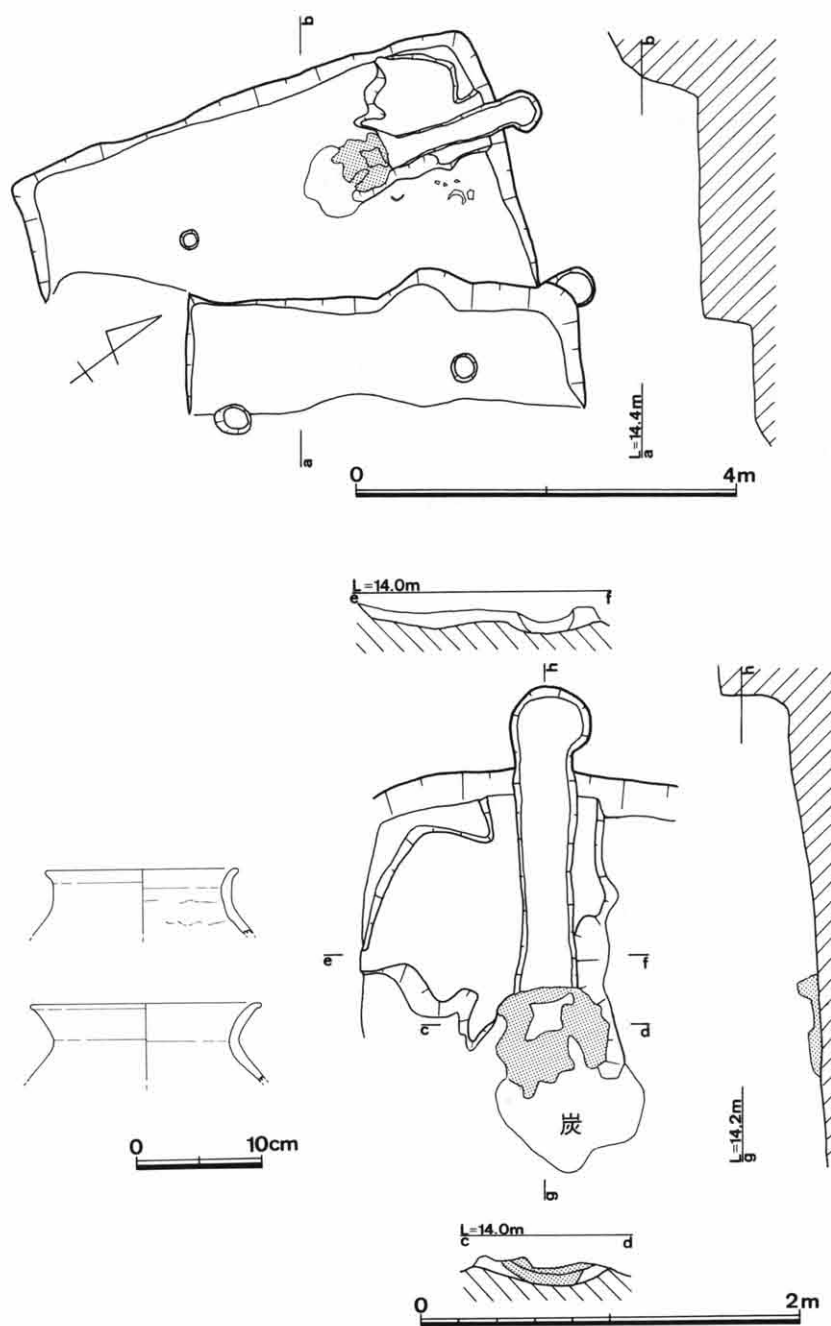
代前半期(陶器編年TK217型式併行期^(注4)、あるいは飛鳥編年の飛鳥IないしII期^(注5))に位置づけられるものと考えられる。以下、竪穴式住居跡SH01の概要について述べる。

竪穴式住居跡SH01は、検出された住居跡では、比較的高所に位置する。住居跡の平面形は方形を呈するが、東側を竪穴式住居跡SH04によって削平されているため西側のみが残存する。規模は、西側の一辺で5.0mを測る。壁高は、西壁で最大0.8mを測る。周壁溝はなく、柱穴1個を確認した(第2図上)。

SH01のカマドは、住居跡の北壁の隅寄りに造り付けられている。煙道を住居内に、煙出しを住居外に設ける。カマド本体は、すでに崩落して原形をとどめないが、長さ0.5m・幅0.6mを測る焼土塊として確認した。焼土塊に煙道を加えた全長は2.0mを測る(第2図右下)。

カマド本体は、床面を全体的に浅く掘り込み、その上に粘土を積み上げて構築されているようである。焼土塊に隣接して拳大の石がみられることから、カマドの基底に石を用いたものと思われる。焼土塊を除去すると、床面が強く焼け締まっている。その前面は焚き口と思われ、炭の薄い堆積層が広がる。

煙道は、黄褐色粘土によって構築されているが、天井部が崩落しているため基底のみ確認できた。煙道長1.5m・煙道内法幅0.3mを測る。煙道の底面は、煙出しに向かってわずかに高くなってい



第2図 竪穴式住居跡SH01実測図・同カマド実測図・同出土遺物実測図
(網目は焼土を示す)

る。煙出しは、住居の壁にほぼ接して設けられている。

また、カマドの西側には、カマドの煙道と同じ黄褐色粘土で床面より一段高くなったテーブル状の部分が確認されたが、その性格は不明である。

竪穴式住居跡S H01のカマドの周辺から、土師器甕が2点出土した。いずれも体部下半を欠損する。京都府北部における土師器編年は十分検討されていないため、これらの土師器のみによって時期を決定することは難しい(第2図左下)。

3. 京都府北部における類例について

次に竪穴式住居内に煙道を有するようなカマドの類例についてみていくことにする。今回は、浦入遺跡の所在する京都府北部^(注6)に限って類例の調査を行った。

カマドの分類 管見によれば、京都府北部におけるカマドの検出例は28遺跡、130例あまりを数える(浦入遺跡を含む)。時期的には、古墳時代中期中頃から奈良時代中頃におよぶが、特に古墳時代後期後半から飛鳥時代前半期に集中する傾向にある。

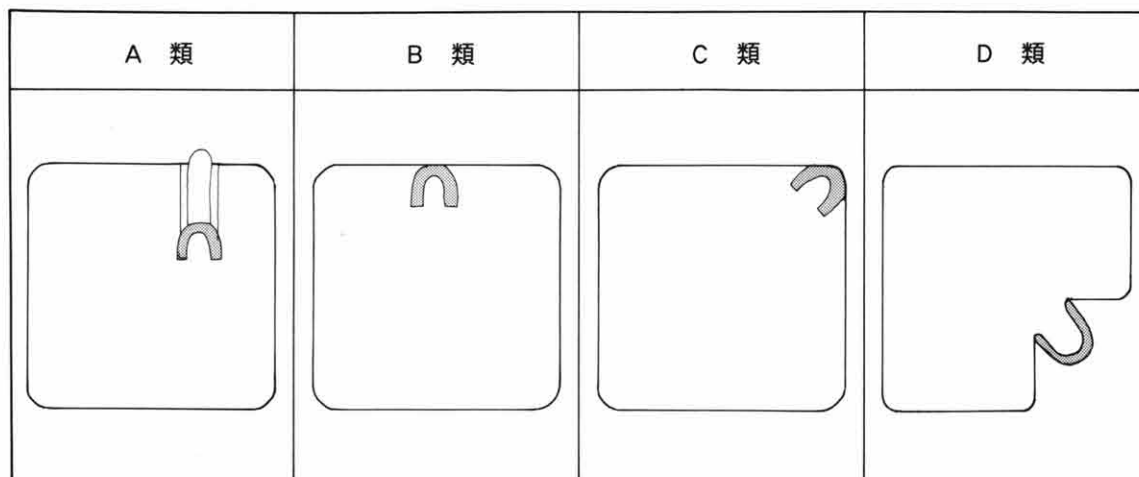
カマドの概要を理解するために、まず、簡単な分類を行っておきたい。分類にあたっては、カマドの構築される場所を重視し、A～D類の4つに分類した(第3図)。

A類 カマド本体が住居の壁から離れて造られるもの。したがって住居内に煙道をともなう。今回、浦入遺跡で検出されたカマドである。後述するように、類例はわずか5例にすぎない。

B類 カマド本体が住居の壁に接して造られるもの。もっとも一般的なカマドの造り方である。管見にのぼった130例あまりのうち、ほぼ半数の60例あまりがB類に相当する。古墳時代中期中頃から奈良時代中頃までの長期間にわたって確認でき、地域的にも京都府北部全域に分布する。

C類 カマド本体が住居の隅部分に造られるもの。C類は15例ほどを数える。量的にも少なく、京都府北部でも散見されるにすぎない。

D類 いわゆる「青野型住居」と呼ばれるものである。「青野型住居跡」とは、住居跡の四隅のうち1つを掘り残して、住居内部に張り出した部分を造り、そこにカマドを造るものである。



第3図 カマド分類図

時期が下がるにつれて、地山を掘り残す度合いが小さくなり、住居内部の張り出しが縮小していく傾向にある。時期的には、飛鳥時代前半期に位置づけられるものが多い。地域的にも現在の綾部市街地での確認例が多い。D類は、40例弱を数え、全体の約3割に達する。

A類カマドの類例^(注7) 管見にのぼった130例あまりのうち、A類に分類されるカマドは、浦入遺跡以外に3遺跡・4遺構で確認できる(第4図)。これらA類のカマドは、いずれも住居跡の隅に寄った位置に造られている。煙道は、住居の壁に沿って造られるが、煙道と住居壁の間に若干の空間を有する(第5図)。4例のうち3例については、形態の上でも規模の上でも非常に類似している。浦入遺跡検出例の場合、カマドと煙道の主軸はほぼ一致するのに対して、これらは煙道に対してカマドの焚き口がやや異なる主軸方向を示している点は注意される(第6図)。時期的には、出土遺物をみる限り、飛鳥時代前半期に限定される。浦入遺跡検出例も含めて、A類カマドの時期の一端を示していると思われる(第7図)。

以下、遺構の概要と出土遺物についてやや詳しくみていく。

①桑飼下遺跡／第1号住居址

桑飼下遺跡は、舞鶴市桑飼下に所在する。由良川下流域南岸の自然堤防上に位置する縄文時代から奈良時代にかけての複合遺跡である。昭和48年に調査が行われ、カマドをともなう竪穴式住居跡1基(第1号住居址)が検出された。

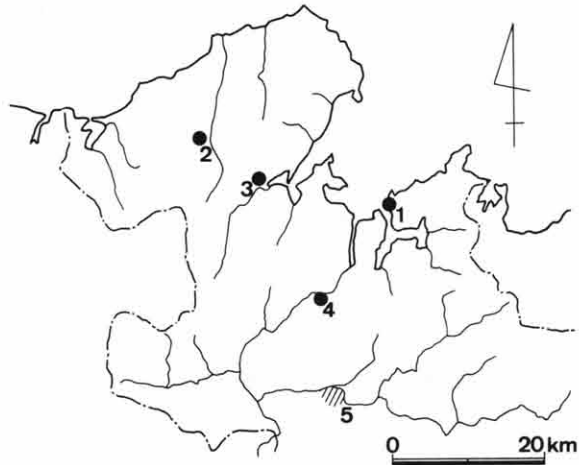
第1号住居址は、一辺が5.9~6.0mを測る方形を呈する住居跡である。カマドは、住居跡の東南隅に造り付けられ、全長2.9mを測る。煙道の大半は、住居内にひきこまれている。地山をやや掘り残し、粘土を積み上げて構築されている。煙道長2.5mを測る。カマド本体は、煙道の主軸に対して、ほぼ直角に折れ、焚き口が西向きに開口すると想定される。

第1号住居址の出土遺物としては、須恵器杯、土師器杯・甕がある。土師器杯の内面に放射状の暗文を有する点や、須恵器杯に口径が10cm程度のものが含まれることから、陶邑TK217型式、あるいは飛鳥Ⅱ期に近い時期が想定される。

②定山遺跡／竪穴式住居跡SH01

定山遺跡は、与謝郡岩滝町字弓木に所在する。野田川河口部左岸に広がる低位段丘上に立地し、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。平成4年度に行われた第3次調査で、カマドをともなう竪穴式住居跡1基(SH01)が検出された。

竪穴式住居跡SH01は、東側が削平されているが、残存する一辺で約6.8mを測る方形を呈する住居跡である。カマドは、住居跡の北東隅付近に造り付けられているが、削平されているため、



第4図 A類カマド分布図

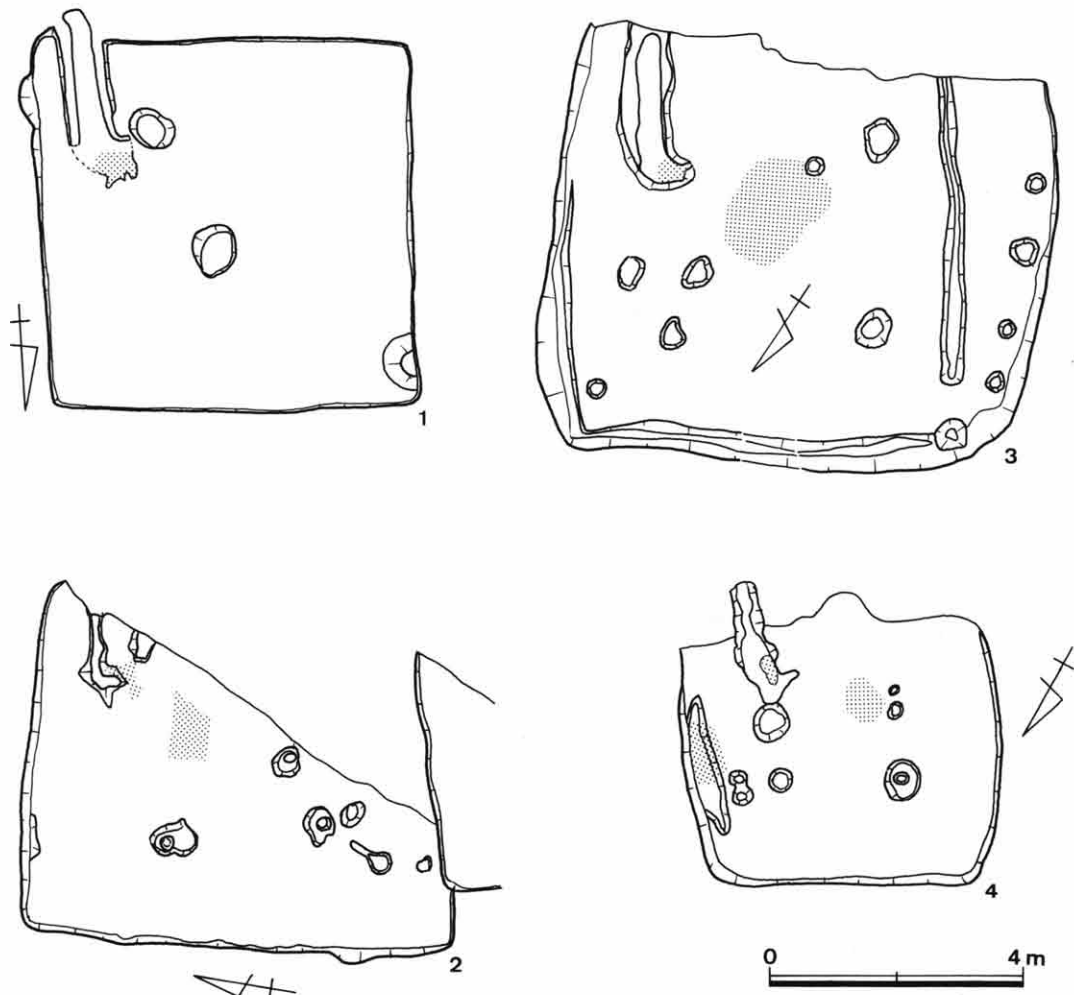
- 1. 浦入遺跡
- 2. 裾谷遺跡
- 3. 定山遺跡
- 4. 桑飼下遺跡
- 5. 青野・綾中遺跡群(参考)

焚き口付近しか残存せず、煙道の構造は不明である。わずかに確認された住居跡の北東隅から、東辺を復原すると、カマドと煙道を加えた全長は1.9~2.2m前後を測る。焚き口が煙道の主軸に対してやや角度を有する。焚き口付近の構造は、中央部に浅い掘り込みを設け、その周辺に粘土を積み上げてある。

竪穴式住居跡SH01の出土遺物としては、須恵器杯H・麴、土師器壺がある。時期の判別しやすい須恵器蓋杯をみると、口径は12cm前後を測り、天井部あるいは底部の調整が粗雑である。これらの特徴から、陶邑TK217型式の古相、あるいは飛鳥I期に位置づけられよう。^(注8)

③裾谷遺跡／竪穴式住居跡SH11・SH12

裾谷遺跡は、中郡大宮町字口大野小字裾谷に所在する。丹後半島最大の河川である竹野川左岸の、少し奥まった丘陵部に立地する。古墳時代後期から中世にかけての複合遺跡である。平成5・6年の2年度にわたって調査が行われ、カマドを有する竪穴式住居跡4基を含む22基の竪穴式住居跡が検出された。このうち、C地区で検出された竪穴式住居跡SH11・SH12がA類のカマドに相当する。どちらの住居跡も、丘陵下位側にあたる南西側の周壁を失う。



第5図 A類カマド検出竪穴式住居跡平面図(網目は焼土を示す)

- 1. 桑飼下遺跡・第1号住居址
- 2. 定山遺跡・竪穴式住居跡SH01
- 3. 裾谷遺跡・竪穴式住居跡SH12
- 4. 裾谷遺跡・竪穴式住居跡SH11

竪穴式住居跡SH11は、一辺4.2mを測る方形を呈する住居跡と思われる。カマドは、住居跡の東南隅に造り付けられる。カマド本体に相当する焼土塊は未確認であるが、焼土面と床面を大きく掘り込んだ溝状の遺構を確認した。溝状遺構の内部が、大きく熱を受けていることからカマドの煙道部分と判断し、焼土面をカマド本体部分と推定した。カマドや煙道を構築していたと思われる粘土は確認できなかった。カマドの残存長は1.9mを測る。ほかの3例にくらべて煙道の構造が大きく異なる。

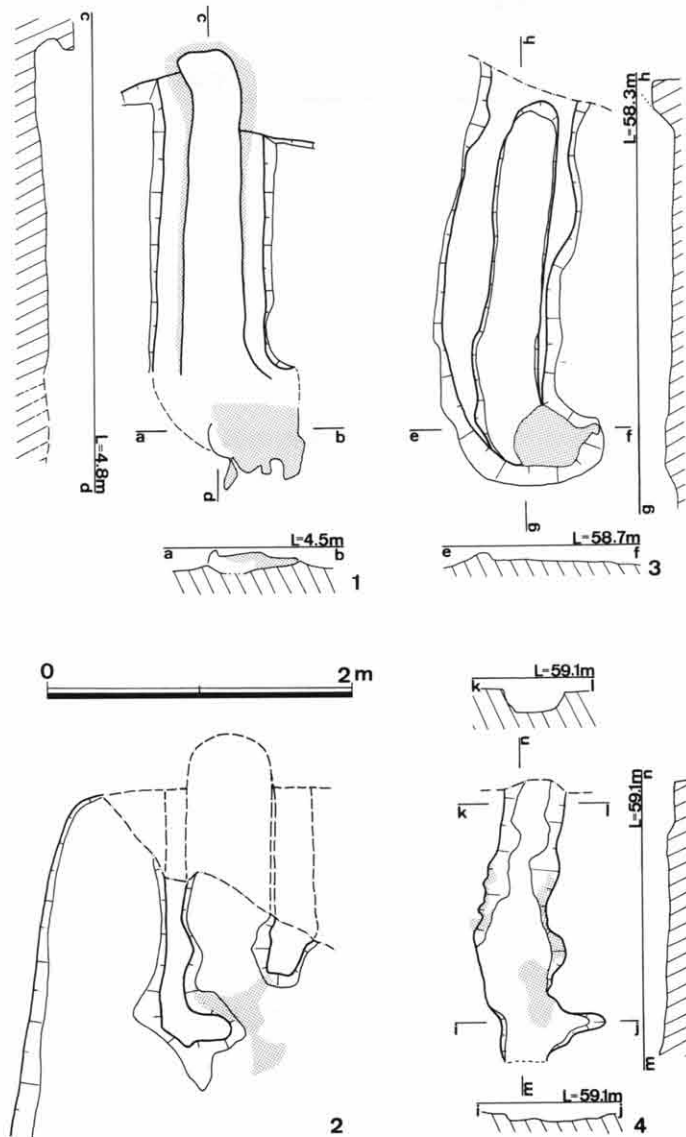
竪穴式住居跡SH12は、一辺6.8mを測る方形を呈する住居跡と思われる。カマドは、住居跡の東南隅に造り付けられる。全体に浅い掘り込みを設けて焼成部と煙道部をつくり、その周囲に粘土を積み上げて構築されている。カマドの残存長は2.6mを測る。カマド本体と思われる焼土塊は、煙道に対して大きく屈曲しており、桑飼下遺跡第1号住居址や定山遺跡竪穴式住居跡SH01で検出されたカマドと同形態といえる。

竪穴式住居跡SH11・SH12ともに出土遺物は少なく、須恵器杯Hが少量出土しているにすぎない。口径が、11.5～13.4cmを測ることや、ヘラ切り後にヘラケズリ調整を行わないことから、陶邑TK217型式の古相、あるいは飛鳥I期に位置づけられる。

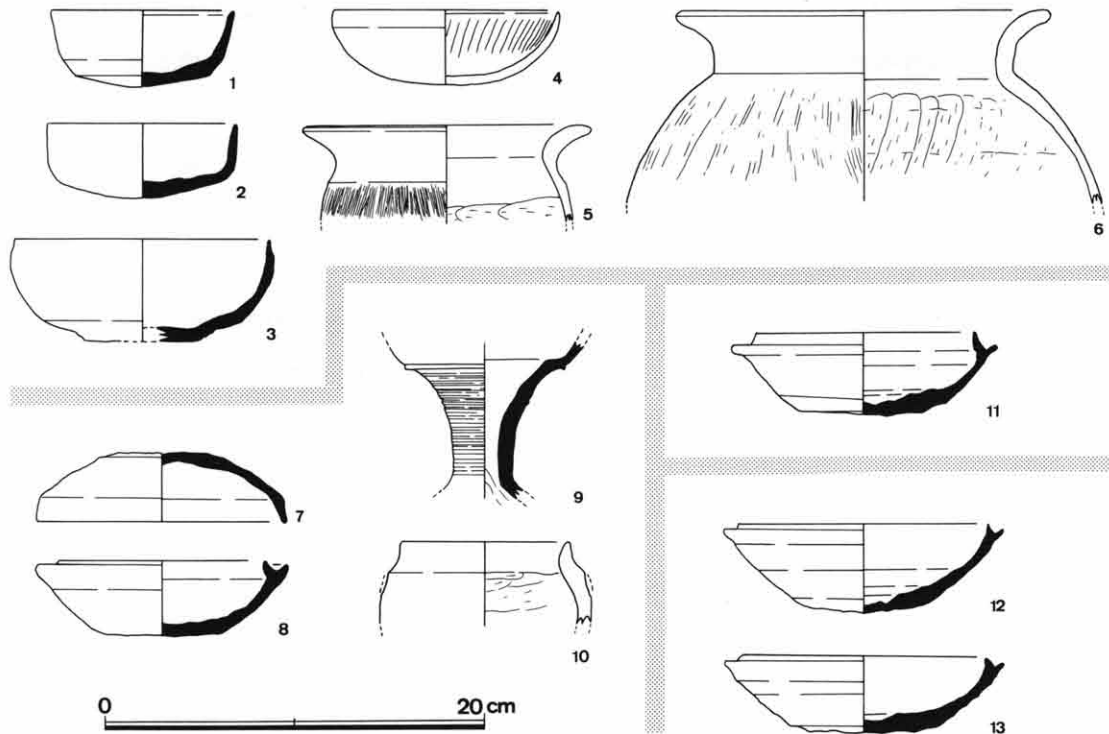
4. 住居内の煙道の機能について

浦入遺跡N地点で検出された住居内に煙道を有するカマドの類例についてみてきた。今回は、類例調査の範囲を京都府北部に限定したため、地域的・時間的な課題に関する検討は不十分なものである。そこで、ここでは住居内に煙道を有することから得られる利点、すなわち長大な煙道の機能について、簡単に考えを述べることにしたい。

長大な煙道を有するという点では、いわゆる「青野型住居」をはじめ、「L字形カマド」あるいは「^(注9)オンドル状遺構」と呼ばれるものが知られている。これらのカマドについては渡来人との関わりが指摘されて



第6図 A類カマド実測図(番号は第5図に同じ)



第7図 A類カマド検出竪穴式住居跡出土遺物実測図

1~6. 桑飼下遺跡・第1号住居址

7~10. 定山遺跡・竪穴式住居跡SH01

11. 裾谷遺跡・竪穴式住居跡SH11

12~13. 裾谷遺跡・竪穴式住居跡SH12

いるが、^(注11)ここで注意したいのは奈良俊哉氏の指摘である。^(注12)奈良氏は「L字形カマド」や「オンドル状遺構」の煙道について「実際の竪穴式住居の中で考えれば、住居空間内に煙道部がある」ことになるので「煙道部の余熱による壁暖房システムになる」と述べられている。

A類のカマドは、いずれも住居内の隅に寄っているとはいえ、住居壁に接しているわけではなく、若干の空間を有している。しかし、奈良氏の指摘する「住居空間内に煙道部がある」ことに変わりはない。このように考えた場合、A類カマドも、「L字形カマド」や「オンドル状遺構」と同様に、煙道部の余熱によって住居内部を暖める機能を有していた可能性が高い。

5. まとめ

小稿では、住居内に煙道を有するカマドの類例やその機能について若干の検討を加えた。京都府北部における類例は少なく、集落においても普遍的な存在ではない。また、現在のところ、その系譜も不明である。ただ、時期については、出土している須恵器から、おおむね飛鳥時代前半期に限定してよさそうである。また、その機能についても、煙道を住居内に設けることによって、住居内の暖房効果を意図したものではないかと推測できる。この点にかかわって、A類カマドにみられるカマド本体が、煙道の主軸に対して大きく屈曲する例がみられることは、「L字形カマド」との関わりを示唆しているように思われる。

A類カマドに関しては、その系譜や機能について、なお不明確な点が多く残されているが、それは今後の類例の増加を待って検討すべき課題としたい。

(つつい・たかふみ=当センター調査第2課調査第2係調査員)

(ならもと・よりこ=奈良大学学生)

- 注1 増田孝彦・筒井崇史「浦入遺跡群平成8年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第79冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注2 竪穴式住居跡とテラス状遺構の区別については、筒井崇史「裾谷横穴・遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995) 57頁に述べている。
- 注3 浦入遺跡N地点では、竪穴式住居跡SH01のほかに竪穴式住居跡SH08・SH12でカマドを検出している。SH08・SH12のカマドは、SH01同様、カマド本体と煙道部分を加えた全長が長い点特徴的であるが、SH01ほど明瞭な形で住居内に煙道を有するわけではない。
- 注4 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966
- 注5 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書』II(『奈良国立文化財研究所学報』第31冊 奈良国立文化財研究所) 1978
- 注6 ここでは、福知山・綾部両市以北を京都府北部とする。なお、類例調査にあたっては、多くの報告書を参考にしたが、すべて割愛した。
- 注7 各遺構・遺物の実測図(第5～7図)は、各報告書から再レイアウトの上、再トレースした。ただし、裾谷遺跡の竪穴式住居跡SH11・SH12のカマド実測図は、新たに作成したものである。各図の出典は以下の通りである。
- 桑飼下遺跡/第1号住居址 渡辺 誠ほか『桑飼下遺跡発掘調査報告書』(舞鶴市教育委員会) 1975
- 定山遺跡/竪穴式住居跡SH01 石崎善久「定山遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第54冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 裾谷遺跡/竪穴式住居跡SH11・12 筒井崇史「裾谷横穴・遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注8 TK217型式の細分は山田邦和氏の分類にしたがう(山田「飛鳥・白鳳時代須恵器研究の展望」『古代文化』第40巻第6号 (財)古代学協会 1988)。
- 注9 「L字形カマド」とは、カマドの煙道をほぼ直角に屈曲させて、住居の壁に沿って煙道を住居外にのばすものを指す。
- 注10 「L字形カマド」と同様の形態を呈するもののうち、石組みの煙道を有するものと理解したい。
- 注11 亀田修一「考古学から見た渡来人」(『古文化談叢』第30集(中) 九州古文化研究会) 1993
- 注12 奈良俊哉「滋賀県日野町野田道遺跡のオンドル状遺構」(『韓式土器研究』V 韓式土器研究会) 1994

内里八丁遺跡第9次の発掘調査

森下 衛

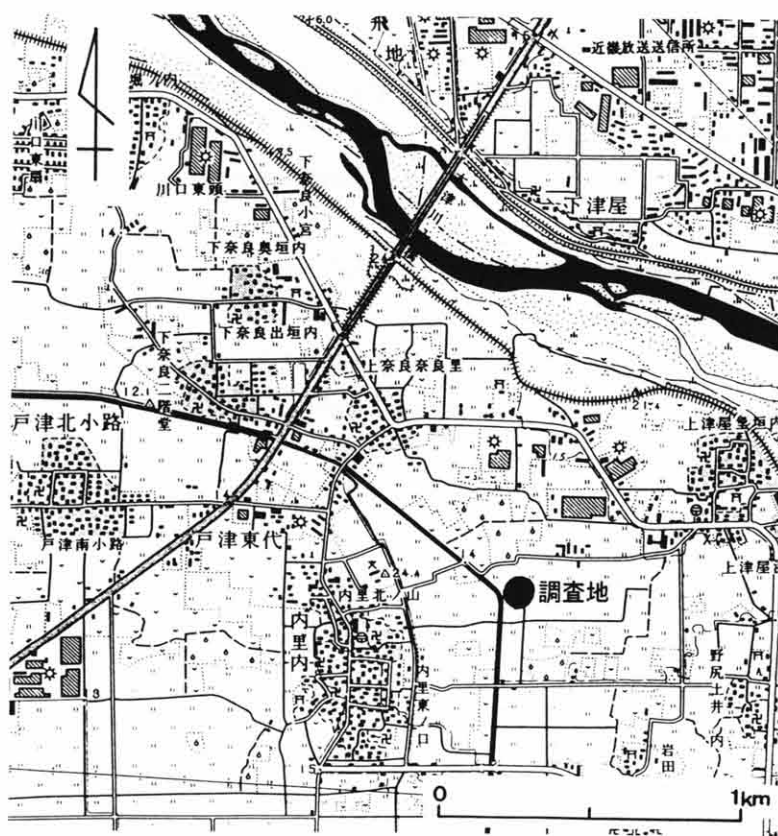
1. はじめに

今回の発掘調査は、第二京阪自動車道路建設に先立ち、日本道路公団の依頼を受けて実施した。第二京阪自動車道路建設に先立つ内里八丁遺跡の発掘調査は、広範囲な遺跡をA～Gの7地区に分け、昭和63年度から順次進めている。そのうち、平成7年度までに8次にわたる調査を行い、A・B・D地区の調査を終了した(第2図)。平成8年度は、これに引き続いて第9次調査として実施したもので、C地区(約1,800m²)及びF地区の北半部(約2,000m²)を対象として調査を行った(第2図)。

内里八丁遺跡は、八幡市の北東部、石清水八幡宮の鎮座する男山丘陵の東方約3.5kmに位置する。一帯は、木津川によって形成された沖積平野が広がり、平坦な水田地帯といった観を呈している。しかし、かつては比較的起伏に富んだ地形をなしていたようで、周囲には木津川の支流だったと思われる旧河道の痕跡や、これによって形成された自然堤防状の微高地などを各所に認め

ることができる。当遺跡は、この自然堤防の一つ、現在のの上奈良集落から岩田集落を結ぶように広がる微高地上に立地している。

なお、内里八丁遺跡の過去の調査では、弥生時代後期終末～古墳時代初頭の集落跡や水田跡、古墳時代中期後半～後期初頭の集落跡、飛鳥時代～平安時代の掘立柱建物跡群、鎌倉時代以降に形成された鳥畑などが検出されている。特に、奈良～平安時代の遺構・遺物に関しては、遺跡の北方にある上奈良・下奈良という地名から『延喜式』記



第1図 調査地位置図(1/25,000)

載の奈良園との関連が考えられるほか、奈良時代には古山陰道^(注1)がこの近傍を通っていたとの説もあり、これに関連した何らかの公的施設との関連も想定されている。

2. 調査の概要

平成8年度の調査では最終的に、C地区で4面、F地区で6面の遺構面を確認し、弥生時代中期～鎌倉時代にわたる時期の遺構・遺物を検出した。また、これらを便宜上、時期別に整理すると、弥生時代中期～古墳時代前期(第Ⅰ期)、古墳時代中期(第Ⅱ期)、飛鳥時代(第Ⅲ期)、奈良時代～平安時代初頭(第Ⅳ期)、平安時代後期～末葉(第Ⅴ期)、鎌倉時代以降(第Ⅵ期)に分けてとらえることができる。

これらのうち、平成8年度上半期(平成8年9月)までに調査を終えた奈良時代～鎌倉時代(第Ⅳ～Ⅵ期)の3時期に係る調査成果の概略については、前々号で報告した。このため、本号では下半期に調査を行った弥生時代中期～飛鳥時代に係る調査成果の概略を報告することにしたい。

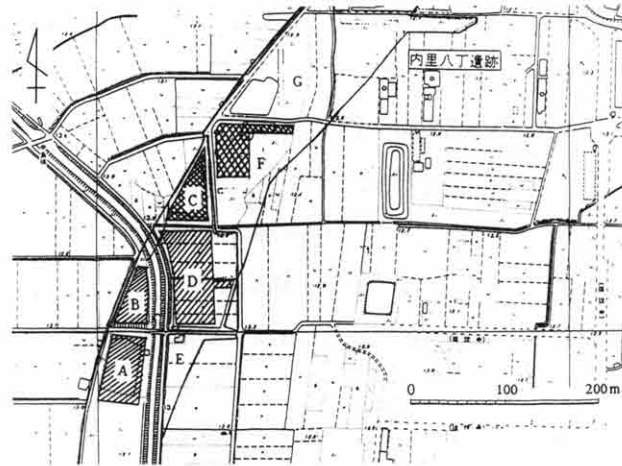
(1) 弥生時代中期～古墳時代前期(第Ⅰ期：C地区第4遺構面、F地区第5・6遺構面)

弥生時代中期の検出遺構は、後述するC地区第4遺構面において、弥生時代後期末の竪穴式住居跡(S H081)の床面で検出した土坑(S K101)がある。一辺約0.5m四方の隅丸方形に近い平面形で、深さ約0.2mが遺存する。

続く弥生時代後期末～古墳時代前期の遺構には、C地区で集落跡に関する竪穴式住居跡10基(S H076～078・082～086・091・092)、周溝遺構2基(S X079・098)、土坑2基(S K080・093)などが検出されたほか、F地区で谷地形が検出された。

C地区で検出した10基の竪穴式住居跡は、一辺5～6mの隅丸方形を呈するものが主体をなし、S H086のみ一辺約7mを測る。また、S H083などは非常に遺存状況が良く、深さ約0.4mが遺存していた(平面形は一辺約5.2mの隅丸方形)。この時期の住居跡は平成6・7年度に行ったD地区(C地区の南側)でも12基が確認されており、今回の成果を合わせると総数21基となる。無論、細かな時期を出土遺物から検討すれば、全てが同時併存とはいえないかもしれないが、当時の集落域がD～C地区にわたり広範囲に営まれていたこと(南北約80m・東西約50m)が確認されたといえる。

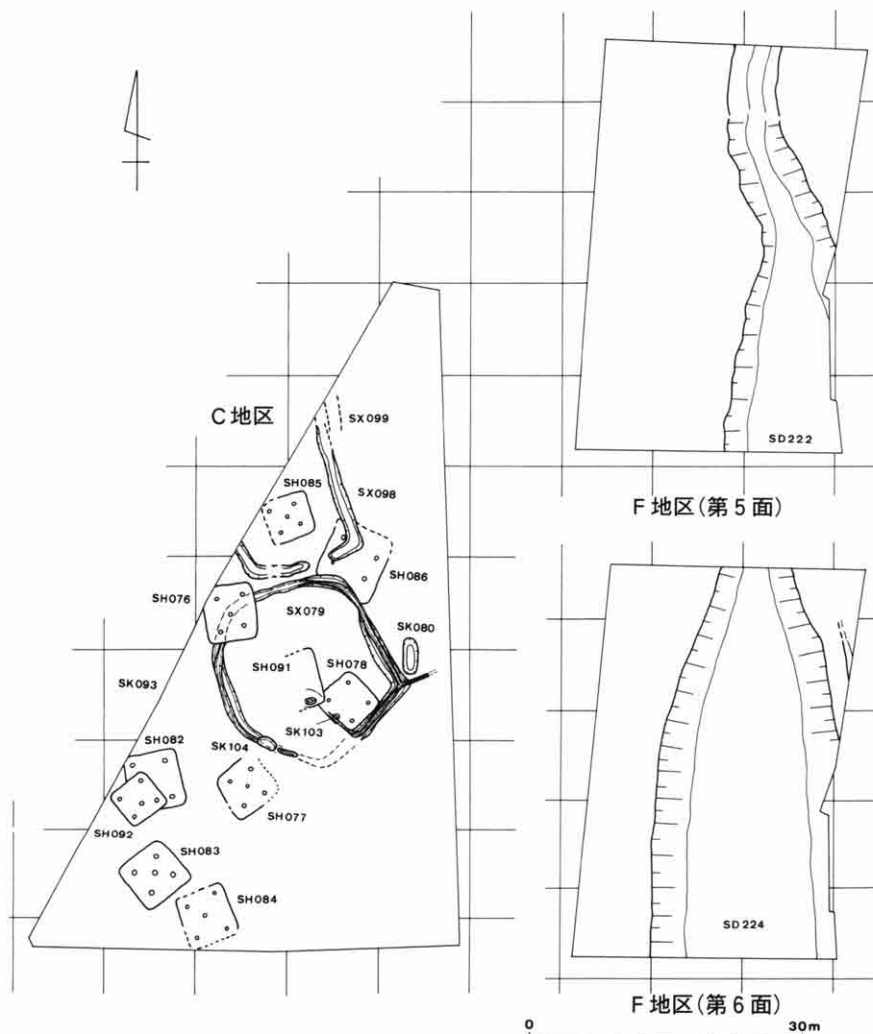
また、検出遺構の中で特に注目されるのは、2基の周溝遺構と竪穴式住居跡との関連である。南側のS X079は平面五角形に溝が巡り、その中央付近で礫敷と楕円形の土坑を伴う竪穴式住居跡(S H091)が検出された。S H091は遺存状態が悪くその全容は不明であるが、特別な性格を有した住居ではないかと考えられるものである。現状では、S X079はこのS H091を取り囲んでい



第2図 調査区配置図

た周溝ではないかと判断している。これに対し、S X098は長方形に溝を巡らしたもの(東西約12m・南北15m以上)と考えられるが、その中央部分でやはり竪穴式住居跡(S H085)を検出しており、これもこの住居跡を囲む溝であった可能性が高い。

一方、F地区で確認した谷地形は幅30m以上を測り、C地区の遺構検出面からは1.5m以上の段差をもって下がる。谷の中央部分では上下2面にわたって流路跡を検出した(F地区第5・6遺構面)。上面にあたる第5遺構面で検出した流路跡(S D222)は、北から南東へ流れるもので、幅は北端で約6m、南端で10m以上を測り、深さ約1.5mを測る。調査区の南端付近で幅が急激に広がっていくことから、この南東側に大きな沼地が形成されていたものと考えている。S D222の堆積土は大きく3層に分かれ、上層からは古墳時代前期～中期、中層からは古墳時代前期、下層からは弥生時代後期終末～古墳時代前期の遺物が出土した。なお、出土遺物には、多量の土器類のほか、木製品(杭や槽、扉板などの建築材)がある。下面にあたる第6遺構面で検出した流路跡(S D224)も、上層のS D222と同一方向に流れるもので、幅は北端で約8m、南端付近で約20mを測る。深さは約1mを測り、埋土は下層の黒褐色粘質土と上層の乳灰色砂層に分かれる。下層にはほとんど遺物が含まれず、上層からは土器類や木製品などの遺物が数多く出土した。な



第3図 第I期主要遺構配置図

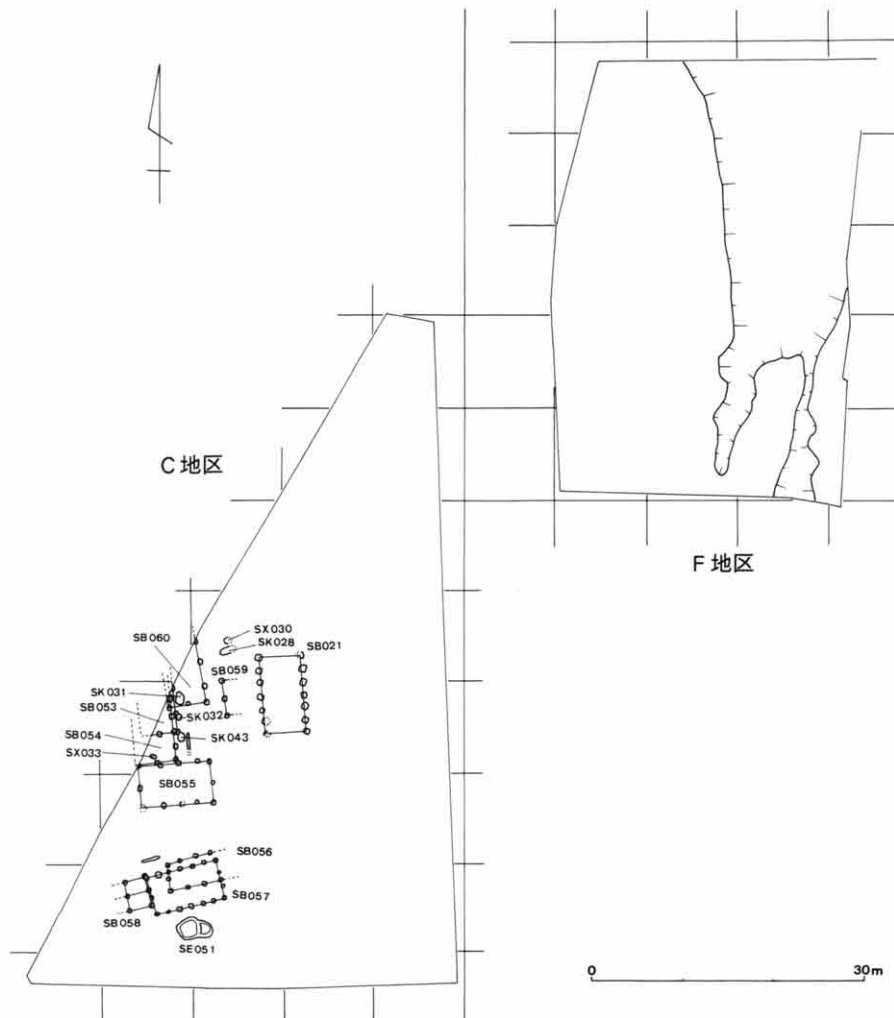
お、この上層をなす乳灰色砂層は、かつてA・B地区で弥生時代末の水田跡を検出した際に、これを覆っていた砂層と同一のものと考えられ、弥生時代後期末頃の洪水によって堆積したものと判断している。

(2)古墳時代中期(第Ⅱ期：F地区第4遺構面、第4図右)

F地区の第4遺構面は、先の流路が埋没してすぐに形成された生活面と判断された。しかし、僅かに古墳時代中期末～後期の土器片が出土し、調査区の東半部を中心に凹地が確認されたほかには顕著な遺構・遺物は認められなかった。出土遺物や遺構面の状況からみて、当地の東側に沼沢地が広がっており、その縁辺としての状況が確認されたものと判断している。

(3)飛鳥時代(第Ⅲ期：C地区第3遺構面、第4図左)

C地区の第3遺構面では、飛鳥時代(7世紀)に属する掘立柱建物跡9棟(SB021・053～060)、土坑4基(SK028・031・032・043)、炉跡2基(SX030・033)、井戸1基(SE051)などを検出した。



第4図 第Ⅱ・Ⅲ期主要遺構配置図(C地区は第3遺構面、F地区は第4遺構面)

掘立柱建物跡は、後世の削平のため遺存状況が悪く、全容が確認できないものも多いが、その主軸の違いから少なくとも3～4時期にわたるものが混在するものと判断している(建物の主軸は北に向かって西へ15～6°振るものが混在する)。

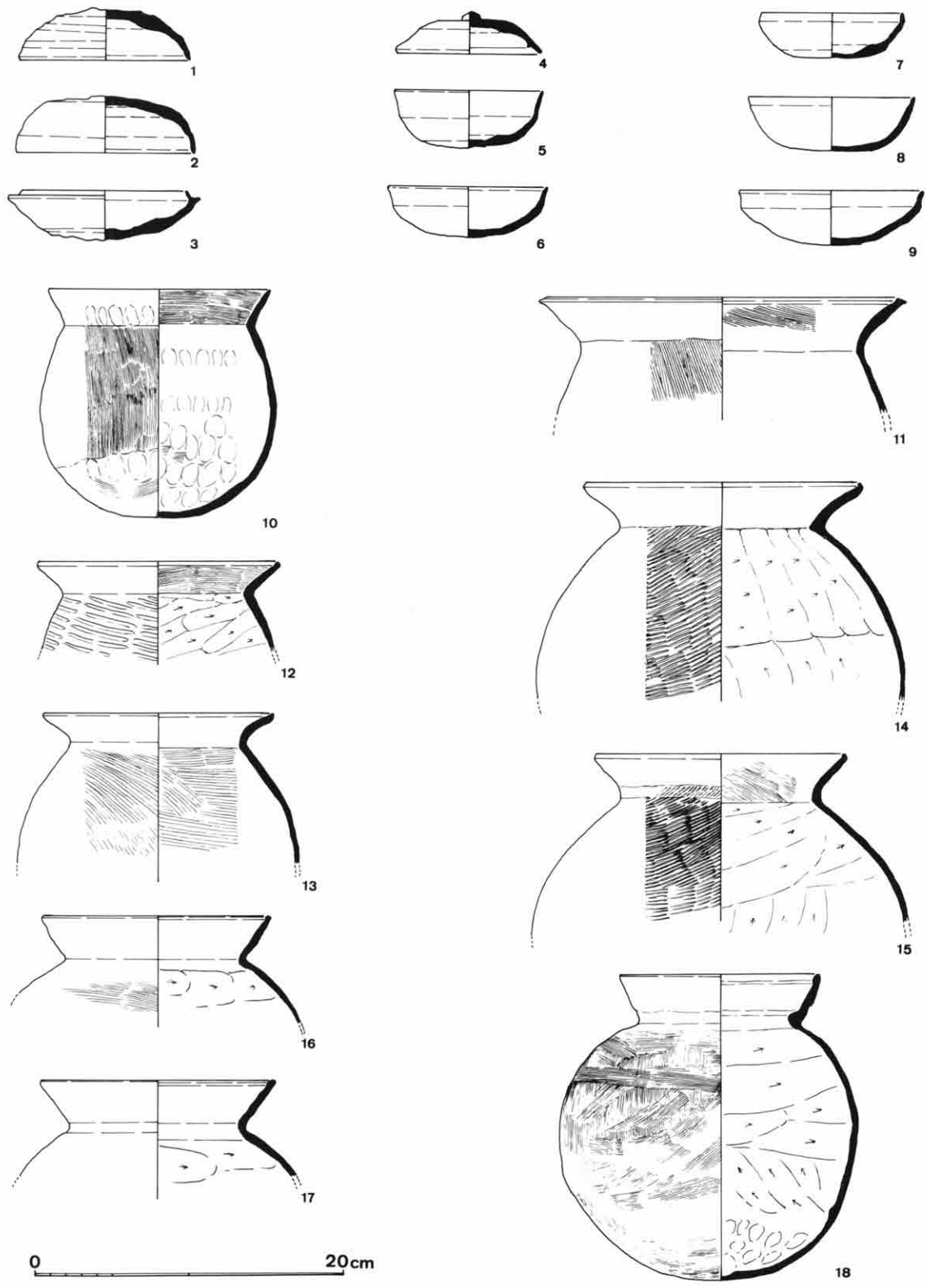
ここで特に注目されるのは、この時期の遺構が掘立柱建物を主体としている点である。従来、南山城地域では住居としての掘立柱建物の導入は畿内の他の地域に比べて遅れ8世紀前半以降にならないと一般化しないと認識されてきた。こうした面からすれば特異な要因を想定すべき遺跡なのかもしれない。ただし、S B 021・054・057の3棟の建物跡は、いずれも桁行が5～6間で柱間が1.5m前後である。この柱間は、通常の住居として使用される建物に比べると狭く、妻入りの倉庫であった可能性が高いと考えられる。また、このほかにも明らかに倉庫と判断している総柱建物跡(S B 058)などもあり、今回検出した一群の建物跡は倉庫を主体としたものであったと理解すべき面も有している。

2ヶ所で確認した炉跡(S X 030・033)も注目すべきものである。いずれも遺存状況は悪く、壁ないしは底部が赤く変色していたことから炉跡と判断したものである。S X 030は0.5m×0.2mの長方形の平面形をなし、S X 033は径0.7mの円形の平面形をなす。調査では、こうした遺構とともに、多量の鉄滓や焼土・灰・鞆の羽口などが出土している。こうした遺構は鍛冶炉の残骸として捉えられるものと考えており、遺跡内で小規模な小鍛冶が行われていたものと判断している。上記の倉庫建物と合わせ、遺跡の性格を考える上で貴重な資料であろう。

(4)出土遺物

現在整理中のため、詳細については改めて報告する予定であるが、ここでは出土遺物の中から主なものを第5図に示した。

1～11は、第Ⅲ期としたC地区第3遺構面に伴うもので、土坑(S K 028)出土資料を主体に図示した。S K 028資料(4～9)は、口径10cm前後で、口縁部内面に返りのある須恵器杯蓋とこれとセットをなす杯身に代表される一群(4・5・7)で、これに土師器の椀タイプのもの(6・8・9)が伴う。本遺構面に伴う出土遺物は、この土器群に代表されるものである。調査では、このほかに口縁部に立ち上がりをもつ須恵器杯身(いわゆるT K 217相当の杯H)とこれとセット関係をなす杯蓋(1～3)も出土しているが、わずかにこの3点のみであり主体をなすものではない。土師器甕類として小型甕(10)及び大型甕(11)を示した。10は、球形の体部と上外方へ短く外反する口縁部からなるもので、S E 051から出土した。11は、長胴気味の体部から大きく外反する口縁部を有するもので、口縁端部はさらに外下方へつまみ出す。包含層中から灰や焼土とともに出土した。時期的には7世紀中葉～後半頃のものと考えている。12～18は、第Ⅳ期としたF地区第5遺構面の流路跡(S D 222)から出土したものである。上記のとおり、S D 222の埋土は大きく3層に分かれるが、ここでは下層及び中層出土資料の中から甕類の一部を図示した。いわゆるV様式系(12・13)、庄内式系(14・15)、布留式(16～18)とされる甕が認められる。



第5図 出土遺物実測図

3. まとめ

以上、平成8年度下半期(平成8年9月～平成9年2月)に行った調査の概要である。これらをまとめると以下のとおりとなる。

①弥生時代後期終末には、C地区からその南側(D地区)を中心に広範囲に集落が営まれていた。

②なかでも、今回はその北半部を検出したこととなるが、周溝に区画された特異な竪穴式住居跡など、注目される遺構が確認された。

③これに対し、F地区では谷地形が確認され、その中央付近を流れていた流路跡からは弥生時代後期終末～古墳時代中期にわたる時期の土器や木製品が大量に出土した。

④その後、古墳時代にはC・F地区とも沼沢地の縁辺として放置されたようで顕著な生活の痕跡は確認されなかった。

⑤飛鳥時代(7世紀後半～末葉)にはC地区を中心に集落跡が確認された。無論、集落はC地区で完結するものとは考えられず、過去の調査でもA・B地区で同時期の遺構群が確認されており、比較的広範囲に広がっていたものと考えられる。

⑥今回の調査成果で特に注目すべき点は、1)倉庫が中心となるようであるが、竪穴式住居跡が確認されず、掘立柱建物跡のみで構成される建物群が検出された点、2)集落内で小鍛冶が行われていた点、の2点である。

⑦先述のとおり、南山城地域では集落に掘立柱建物の導入が畿内の他の地域より遅れた点が指摘されており、久世郡衙とされる正道遺跡など数例の遺跡で掘立柱建物群が確認されているにすぎない。こうした面で遺跡の性格として官衙などの特別な要因が想定される場合が多い。あくまで今回の調査地は、比較的広範囲に広がる7世紀代遺構群中の一画にすぎず、全体の性格付けに関しては、小鍛冶が行われていた点と合わせ、今後、十分な検討が必要であろう。

なお、本報告文は、現地調査を担当した古瀬誠三主査調査員、大岩洋一調査員(当時)と検討を重ねた内容を森下が執筆した。

(もりした・まもる=当センター調査第2課調査第3係調査員)

注1 足利健亮『日本古代地理研究』 1985

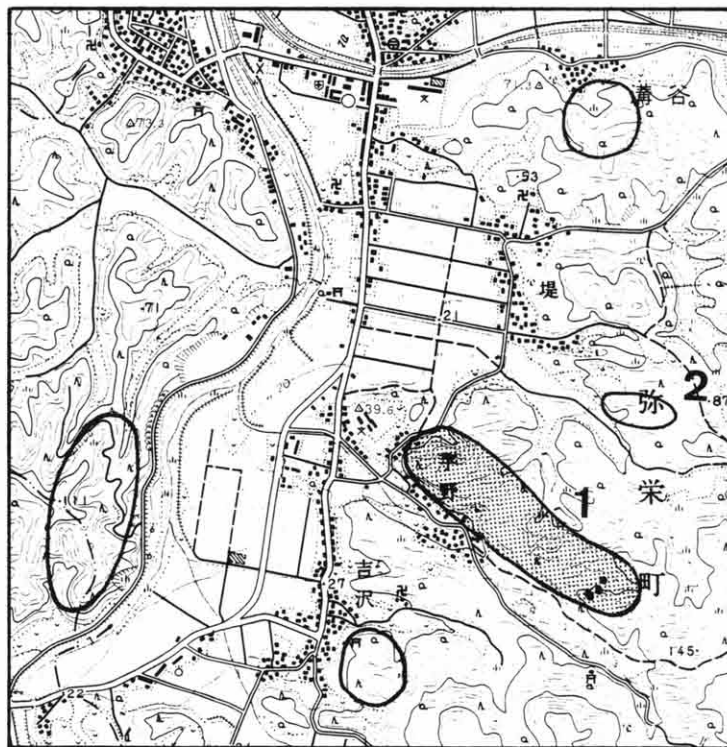
平成9年度発掘調査略報

1. 芋野城跡

調査地 竹野郡弥栄町字芋野
 調査期間 平成9年5月23日～7月1日
 調査面積 約1,200m²

はじめに 今回の調査は、丹後国営農地開発事業に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。芋野城跡は、中世の丹後地方を広く治めていた一色氏の居城の一つと考えられる。調査地周辺には、一村落一城といわれるほど多くの中世山城が知られている。芋野城跡は、平野部に向かって東西にのびる尾根上にその範囲(900m×200m)が推定されている。しかし、城の本体(本丸)の規模・構造はもとより、付属の郭や土塁などの施設の存在も現状では全く不明である。今回の調査地は、芋野城跡の中でも平野部からかなり奥に入っている(第1図)。標高は120～135mを測る。3か所の尾根上の調査地(No. 1～3地区)にトレンチを設け、山城関連の遺構検出に努めた(第2図)。

調査概要 No. 1地区は、尾根頂部が細い切り通しの道により二分されている。その東側の頂部では、赤褐色粘質土の堆積が約60cmの厚さで認められた。これは、切り通しの道をつける際に排土が盛り上げられたものと考えられる。遺物は、表土直下で土師器杯(12世紀末頃)の底部が1点出土した。ここに経塚や古墓などの遺構が存在していた可能性はあるが、その痕跡は完全に失われている。No. 2地区は、浅い表土直下で堅い地山面(岩盤)となり、遺構・遺物は検出されなかった。

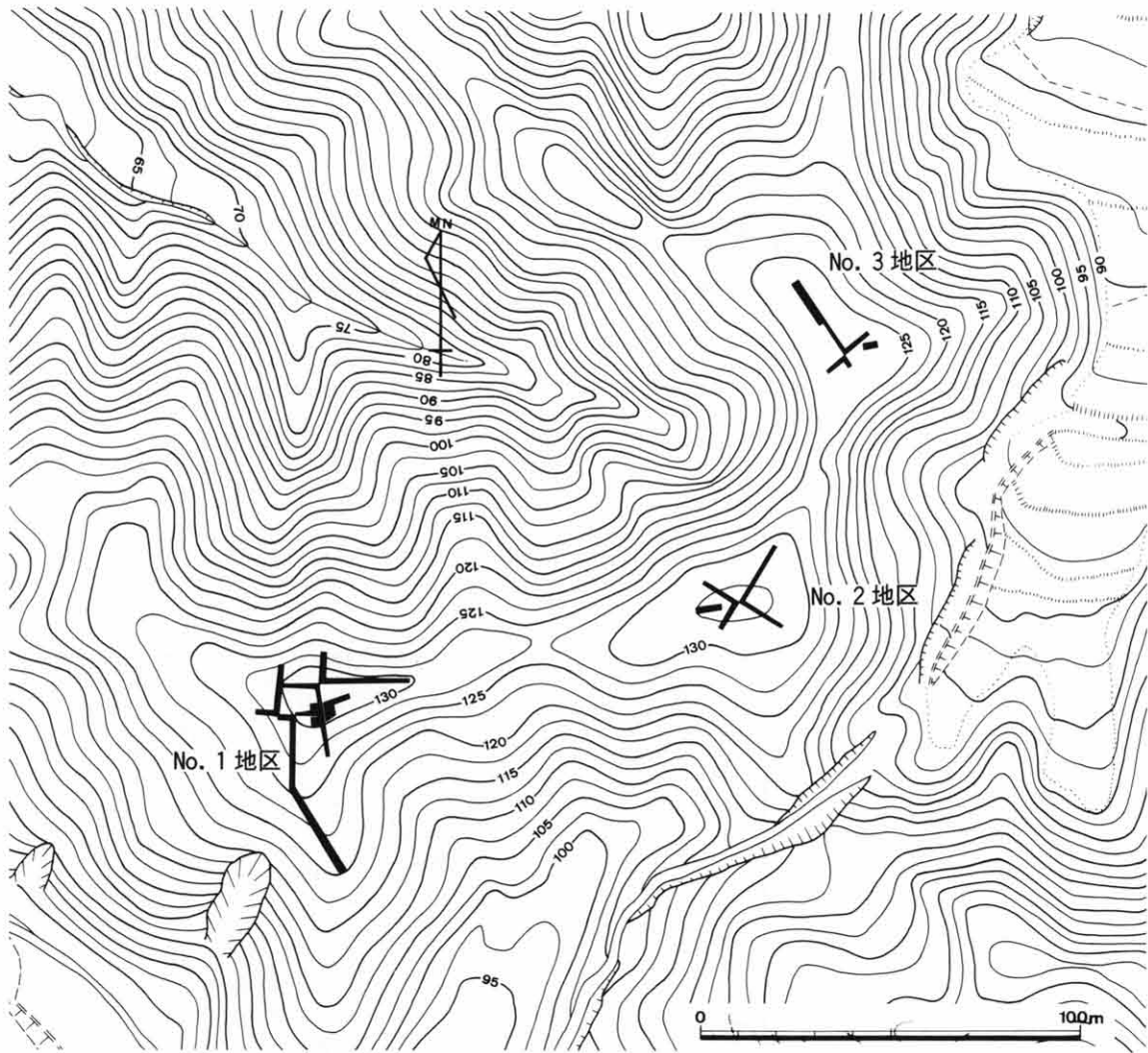


第1図 調査地位置図(1/25,000)

1. 芋野城跡(調査地●印) 2. シミズ谷城跡

No. 3 地区は、最高位の古墳状隆起のところで岩盤面が表土直下で露出し、遺構・遺物は検出されなかった。これに続く尾根の裾部で、礫層や暗黄褐色粘質土層の厚い堆積を確認したが、遺構・遺物の検出はなく、これらは自然堆積層と判断した。今回の調査では、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。芋野城跡の範囲について再考する一つの材料を提供するといえるが、今後とも芋野城跡については、慎重な調査が必要である。

(黒坪一樹)



第2図 調査トレンチ配置図(1/2,000)

2. 相之目古墳

所在地 中郡峰山町字二箇小字相之目233他
 調査期間 平成9年5月8日～6月18日
 調査面積 約70m²

はじめに この調査は、丹後東部地区国営農地開発事業(二箇団地)に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。相之目古墳は、三角点が置かれた丘陵頂部(苗代城跡推定地)から、南東方向にのびる尾根筋にある。この尾根筋の中間に古墳上の高まりが2か所あり、開発予定地内とされた。しかし、丘陵先端側(南方のもの)は、開発予定地に含まないことになったため、北方に位置するもの(今回試掘調査)が対象地となった。

調査概要 調査対象地域の伐採後、最初に地形測量を行ったところ、尾根筋の高まりは自然地形の可能性も考えられたので、試掘調査を実施することにした。

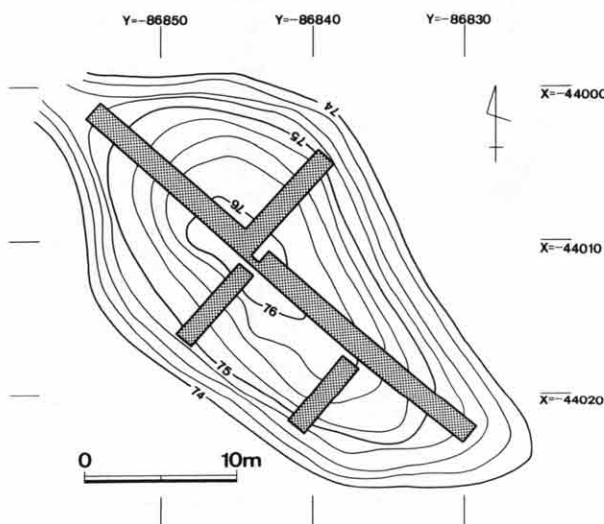
マウンド上の土壌(埋葬施設)などが想定される場所を中心として幅1.2～1.5mのトレンチを設定し掘削した。

中心の高い場所では表土下約20cmで「地山」と推定される固く締まった明赤褐色粘質土、低い場所(南側)では表土下約10cmで黄色砂礫質土(花崗岩風化土)となる。中心部では、深掘りしても埋葬施設といえる土色変化もみられなかった。遺物の出土もないので、粘質土の固く締まった地層が高まりとして残存した自然地形と判断できる結果となった。

(石尾政信)



第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 調査地平面図

3. 中海道遺跡第46次

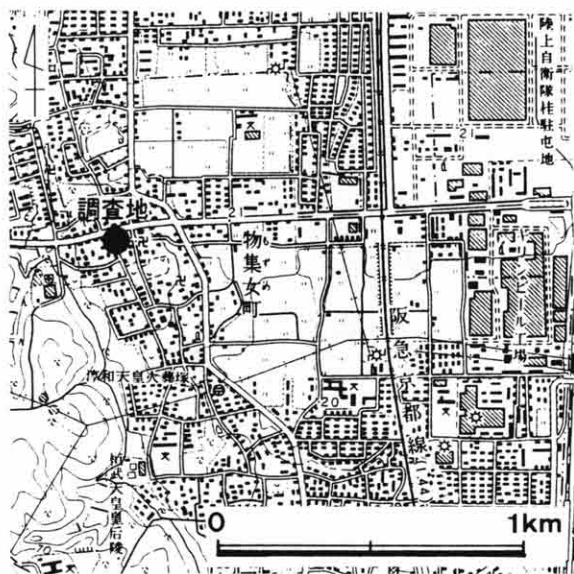
所在地 向日市物集女町御所海道
 調査期間 平成9年5月12日～7月10日
 調査面積 約300m²

はじめに 中海道遺跡は、標高90m前後の向日丘陵の東側斜面裾部に形成された集落遺跡である。遺跡の広がり、東西約600m・南北約500mと推定され、縄文時代から中世に至るまで、断続的に形成された複合的な遺跡である。これまでの調査では、各時代にわたっての遺物や遺構が検出されているが、とりわけ弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての遺構・遺物が数多く検出されている。特に、1995年度に(財)向日市埋蔵文化財センターによって実施された第32次調査(今回の調査地点の北東約200m)では、多くの竪穴式住居跡や掘立柱建物跡のほか、方形の区画溝を持つ大型掘立柱建物跡が検出され、周辺に所在する前期古墳とも関わって、調査地周辺の集落を束ねる首長の政治的拠点ではないかと推定されている。

今回の発掘調査は、広域幹線アクセス街路整備工事(久世北茶屋線)に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。

調査概要 今回は、道路に沿って、2か所の地点で発掘調査を行った。以下、西側を第1トレンチ、東側を第2トレンチとして、調査成果について簡単に述べておく。

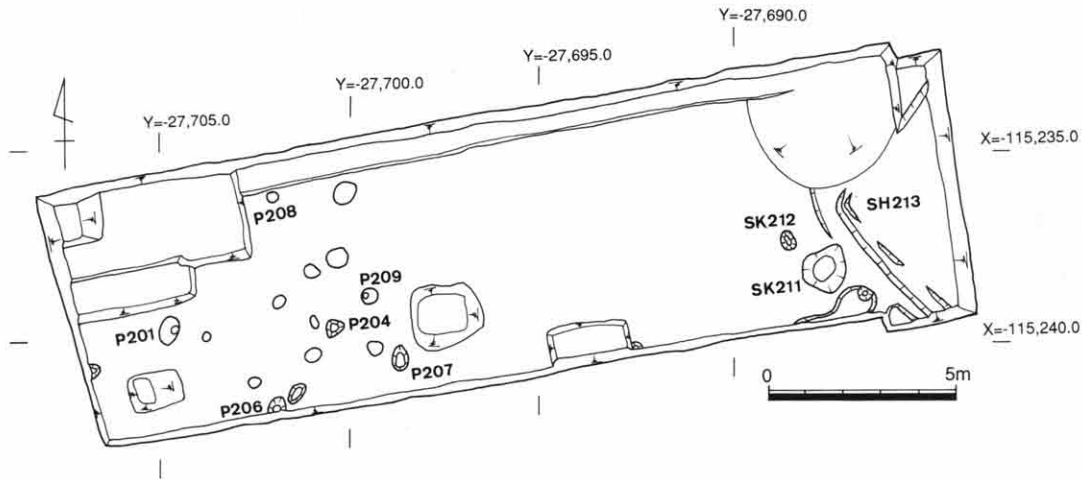
第1トレンチ 昨年度、第42次調査第3区として、第1トレンチの東側に隣接する地点で発掘調査が行われたが、調査地点が後世に削平されており、遺構や遺物を検出することができなかった。今回の調査でもこの結果を追認することとなり、顕著な遺構・遺物の検出はできなかった。



第1図 調査地位置図(1/25,000)

第2トレンチ 地域での聞き取りによれば、この第2トレンチの部分には昭和の初めまで、土塁状の高まりがあり、この高まりを掘削して現在の宅地・道路としたそうである。話された方がたは、この高まりを「御土居」と表現されており、この高まりは、中世の城館であった物集女城に関わる何らかの遺構であった可能性がある。

トレンチの中央部やや西寄りでは数cmの現表土の直下に暗茶褐色の土層が確認され、ここからは弥生土器や須恵器片が出土した。また、調査開始前に、平安時代のもと思われる



第2図 第2トレンチ遺構平面図(1/200)

る緑釉陶器の底部や須恵器片を表土上で採取しており、この土層が土塁状の高まりの下層にあたると思われる。トレンチの西側ではこの暗茶褐色土の下層に明黄灰褐色砂質土が見られ、東側には黄褐色砂礫土が堆積している。さらに、その下層には暗黒灰色の土層が約10～20cmの厚さで調査地の一面に広がる。この暗黒灰色の土層の西側の上面で数か所のピットを検出し、そのうちのいくつかには弥生土器の小片が含まれていた。また東側では、一辺が3m以上と推定される方形の竪穴式住居跡(SH213)の一部を検出した。出土した土器から弥生時代後期末の遺構と推定される。さらに、この方形の住居跡の外側では、わずかに円形にめぐむような落ち込みを確認した。この方形の住居跡は、それ以前に建てられた円形の竪穴式住居跡の上に建てられた可能性もある。

これらの遺構が検出された暗黒灰色の土層の下層は、西側では淡茶褐色の礫を多く含む土層が厚く堆積している。東側も淡灰褐色砂質土、その下層に淡茶褐色礫質土が堆積しており、遺物は見られなかった。

まとめ 今回の調査成果は、以下の諸点にまとめられる。

①竪穴式住居跡(SH213)の検出により、これまでの調査で明らかにされてきた、弥生時代後期の集落の存在を改めて確認することができた。

②平安時代から中世にかけては、今回の調査では遺構の検出はできなかったものの、若干ながらも遺物が出土しており、これまでの周辺の調査で確認されているように、該当期の何らかの営みがあったことが想定できる。

③道路に沿って第1トレンチの西方は、近世以前の生活面は削平されていることが確認できた。しかし、第2トレンチでは、表土直下に弥生時代から平安時代の遺物を含む暗茶褐色土の堆積が見られることから、平安時代以降にこの削平に伴う土を利用して、第2トレンチの周辺を整地、盛り土したと考えられる。今後さらに検討を要するが、土塁状の高まりが物集女城に関わる人工的なものとする、この暗茶褐色土がその最下層にあたる可能性がある。

(竹下士郎)

4. 長岡京跡左京第400次(7ANEMR-4地区)

所在地 向日市鶏冠井町南金村
 調査期間 平成9年5月1日～7月30日
 調査面積 約630m²

はじめに 今回の発掘調査は、流域下水道ポンプ場施設建設工事に先立つもので、調査対象地は、長岡京左京二条三坊五町・東三坊坊間小路にあたり、長岡京造営以前の遺跡としては弥生時代を主体とした鶏冠井清水遺跡にあたる。長岡京跡左京二条三坊五町内では、左京第172次調査で2間×5間の身舎に1間の廂を設けた比較的規模の大きな建物跡を検出しており、小路の検出とともに五町域での建物跡などの検出が期待された。

検出遺構 今回の調査では、主に東西方向の溝群を検出し、同遺構内からはほぼ13世紀の土師器皿・瓦器椀が出土しており、この地が中世には畑などに利用されていたことが明らかとなった。

長岡京期の遺構としては当初の予想どおり、東三坊坊間小路の西側溝と路面跡を検出した。ただ、東側溝は調査地の東側で大きな攪乱によって削られている可能性が高く、検出にはいたらなかった。東三坊坊間西側溝は、上面幅約1.0m・深さ約0.3m以上を測り、長さは調査地全域の約28.4mを検出した(北端の座標；X=-117,727.000・Y=-25,515.651、南端の座標；X=-117,755.400・Y=-25,515.970)。長岡京期の遺構では、もう一つの調査成果を期待した五町域の宅地利用を示す建物跡などの遺構は、今回の調査地では検出できなかった。

長岡京造営以前の遺構としては、方形周溝墓を4基検出した。ただ、各方形周溝墓の埋葬施設は、長岡京期以降に削り取られており検出できなかった。方形周溝墓1は、東西約8.5m・南北



第1図 調査地位置図(1/7,500)

約10.0m(いずれも溝の心々距離)、方形周溝墓2は、東西12.5mで、南北方向の溝は調査地外のため規模は不明である。方形周溝墓1と方形周溝墓2は、1の北辺溝と2の南辺溝で重複関係があり、方形周溝墓2を切って方形周溝墓1が造られていることが明らかとなった。方形周溝墓3・4は、方形周溝墓1の東辺溝と共有する一辺約4m前後の小規模な方形周溝墓である。方形周溝墓からは、弥生時代第Ⅱ様式の土器が出土した。

出土遺物 中世の溝からは土師器皿・瓦器椀が出土した。瓦器椀は、内面に暗文をてい

ねいに施した13世紀前半の特徴を備えている。

長岡京期の遺物は、東三坊坊間西側溝から出土しており、土師器皿・須恵器蓋などがあり、土器の中には「国」と墨書した土師器皿や硯に転用した須恵器蓋もある。土器以外には、銅銭(萬年通寶・神功開寶)・横櫛・獣骨(馬か?)がある。

弥生時代の遺物としては、各方形周溝墓の溝内から第Ⅱ様式の櫛描き文を多様した広口壺・細頸壺・鉢などが出土しており、土器は主に溝のコーナーに集まっている傾向がある。また、方形周溝墓1と2の重複する地点で、木製の鋏が出土した。

まとめ 今回の調査では、これまでの長岡京では検出例がなかった東三坊坊間小路の側溝を検出し、長岡京の条坊復原の一資料となった。ただ、もう一つの調査目的であった、左京二条三坊五町域の宅地利用を示す遺構は、五町域の宅地内でも東端の一部が調査地点であったためか、明瞭な建物跡は検出できなかった。弥生時代の遺構としては、主軸をほぼ磁北にあわせた一辺12m前後のものと、一辺4m前後の小規模な方形周溝墓があり、溝の一部は共有している。これらの方形周溝墓は、鶏冠井清水遺跡を含めて調査地周辺の遺跡(主に鶏冠井遺跡)でも検出例が増加しており、周辺地域を含めた弥生時代の検討が必要である。

このように、今回の調査は比較的規模の小さな調査であったが、長岡京期やそれ以前の遺構・遺物を考える上での有効な調査となった。(石井清司)



第2図 長岡京跡左京第400次・鶏冠井清水遺跡(上が北)

研修だより

平成7年度全埋協近畿ブロック海外研修報告

伊野近富・竹井治雄・石尾政信・黒坪一樹

全国埋蔵文化財法人連絡協議会(以下、全埋協と略する)近畿ブロックの海外研修は4回目となり、今回は浙江省文物考古研究所に受け入れの窓口として骨を折っていただいた。これは、研修のテーマが「稲作の起源を訪ねて」ということによる。従前は、中国社会科学院考古研究所であった。

今回は、長江下流域の遺跡及び博物館を中心に見学した。メンバーは近畿圏の6団体14名で、平成7年11月1日(水)から8日(水)までの8日間の研修である。全日程晴天に恵まれ、秋とはいえ、暖かい毎日であったが、最後に北京を訪れた際は風が厳しく、寒さを痛感した。では、日を追って説明したい。

11月1日 関西新空港から空路上海へ入る。ここで、浙江省文物考古研究所の方向明館員と出会い、以後6日まで案内していただいた。午後専用バスで江蘇省蘇州市の草鞋山遺跡^{そうあいざん}に到着した。遺跡は陽澄湖南岸に位置する。1956年に発見され、1972～1973年に本格調査され、新石器時代の住居や墓が確認された。1992年から夷陸山(比高10mほどの小丘)の南西方向にある畑地を調査し、馬家浜文化^{ばかひん}の遺構(一区画3mほどの水田跡)が検出された。ここでは南京博物院鄒先生から説明をいただいた。

11月2日 午前中蘇州市内見学。市内には多数の水路が走り「東洋のベニス」とも呼ばれる。市内を方形に運河がめぐり、この南西隅に盤門がある。敵を防ぐために門に細工がされており、上部から門扉が落とされる構造である。

次に盤門近くの碑刻博物館を見学した。明・清時代の石碑を多数展示している。

蘇州市博物館では、市内で発見された資料を中心に展示してあった。特に、春秋戦国時代の呉国(B.C. 5～6世紀)の出土品の中に、日本の石庖丁と同様の銅製品があり、団員達は注目していた。また、呉王の墓から出土した数mm大の水晶玉の多さに驚いた。

以上のような紀元前の資料の他、五代や唐代の越州窯青磁、定窯の白磁が展示されていた。

午後、バスで一路嘉興市へ向かった。ここには長江下流域の太湖平原の新石器時代を代表する馬家浜遺跡がある。現在、新石器時代のこの地域では、以下の3文化が類型とされている。すなわち、古い順から河姆渡文化^{かぼと}・馬家浜文化^{ばかひん}・良渚文化^{りょうしよ}である。

河姆渡文化は、骨器が主体で、他に石製・木製・土製の生産用具が出土しており、稲作の存在

を物語る炭化米が多数出土している。

馬家浜文化は、水稻栽培が広くゆきわたった段階で、また、多種類の水生動物も出土し、安定した経済生活を送っていたらしい。土器も多数出土していた。

良渚文化は、新たな工具の使用、耕作技術の改良進歩と規模の拡大により、原始農業に比較的大きな向上があったと評価されている。

さて、馬家浜遺跡の現状は水田で、稲が稔っており、収穫を待つばかりとなっていた。周辺を見渡してもひとつの山も見えない、大平原の中であるが、かつては湖沼のほitoriであったらしい。遺跡見学が済んで、農道を歩きバスへと向かった時はもう夕方で、夕陽の残光が背の高い桑の木を照らしていた。

夜は、嘉興市の繁華街を散策した。そこで“五芳齋”という店のちまきを食べた。とてもおいしいもので、値段は2.5元であった。

11月3日 バスで、桐郷市の普安橋遺跡へと向かった。この遺跡は日本(上智大学量先生)・北京大学・浙江省文物考古研究所の三者で、1995年の9月～10月まで発掘調査を実施したもので、訪中団の案内をしていただいた方向明氏も参加していたという。我々が訪れた時は調査は終了していたが、トレンチや土層観察用畦などがまだ残されており、方氏から具体的な説明を受けた。

遺跡発見の発端は、レンガ工場の土取り場として使用中に玉器が発見され、遺跡として周知されていた。

遺跡は土墩と呼ばれる低丘陵上にある。地表下40cmまでが表土で、それ以下が暗褐色粘土の良渚文化期である。墓が5～6基あり、玉器が副葬されていたという。土器は北に置いている。良渚文化の細分は土器と玉器の編年次第であるが、現在整理中とのことである。

午後、桐郷市の羅家角遺跡を見学した。同遺跡は1956年に発見され、1979年に発掘調査された。下層は河姆渡文化と重複し、上層は馬家浜文化と重複する。ただし、これには異論があり、羅家角の早期資料が馬家浜文化に属するという考えもある。発掘調査により栽培稲が出土した。また、陶釜が出土し、炊飯が行われていたことが判明した。

遺跡の現状は桑畑である。周囲より一段高い丘陵上に位置する。桑畑の中に入ってみると、土器・陶器の破片が多数散乱していた。

遺跡見学後、バスで杭州市へ向かった。到る所でレンガ用の粘土を採取しており、電信柱周辺のみ4～5mほどが掘り残され、他は2mほど全体的に削平されていた。訪れた季節は白菊の収穫期に当たっており、到る所で摘んだ菊花を1～2mの円形に地面や板の上に並べていた。これを菊茶として加工するのだという。

11月4日 杭州市から余杭市へと向かう。まず、笕山遺跡を訪れる。この遺跡は、竹林と茶畑とがある丘陵の頂上にあり、そこから良渚文化博物館を眼下にすることができた。良渚文化期の高床式の建物があったという。

次に良渚文化博物館を見学した。まず、副館長の盛先生から良渚文化について概説を受け、23分間のビデオ「文明的曙光」を視聴し、その後、館内を案内していただいた。

先生によれば、良渚文化の発掘は1936年にされ、1959年に正式に命名されたという。1984年から発掘が本格化し、特に1986・7年の反山遺跡と瑤山遺跡の発掘では多数の玉器(1236点の遺物の内の90%が玉器)が発見された。中国では毎年十大遺跡を発表しているとのことで、良渚文化の遺跡は1991年と1992年に選ばれたという。ユネスコの世界文化遺産にもなるかも知れないとのことであった。博物館は1994年に開館し、75,000人の来客があったという。その内、日本からは1,800人という。

良渚文化の基本的層序は、表土層(40cm)黄色土、良渚文化層(60cm)黄褐色土、松澤文化層(30cm)灰黄色土、馬家浜文化層(80cm)灰色土、生土層(地山)中黄色土である(展示パネルによる)。

博物館を出て、莫角山遺跡へ向かう。良渚文化期の遺跡である。この遺跡は工場建設時に発見された。遺跡は保存されたが工場はすぐ横に建設されていた。そのうち、移転されるとのことであった。

遺跡は緩やかな丘陵地にあり、東西約670m・南北約450mが範囲だという。人工的につき固めた丘であるとの説明を受けたが、トレンチは水没しており、確認できなかった。

次に滙観山遺跡を見学した。これは丘陵頂にある良渚文化期の遺跡である。方形周溝墓に似た遺構が検出された。ただし、中央に墓壙はない。まわりは石垣をめぐらせており、祭壇と考えているとのことである。民家を建設する際に発見されたという。遺跡は保存された。

反山遺跡を見学した。1987年の発掘調査で、良渚文化期の墓が12基検出された。いずれも南北方向に並んでいた。副葬品は豊富で玉器・陶器など700点余り出土した。また、方形の祭壇(約400m²)状遺構もあった。祭壇は3重で、もっとも外側は石でおおわれていた。また、内側には焼けた跡があった。これらの墓は、良渚文化期の村の首領あるいは貴者と考えられている。

なお、中心部分は広い範囲に2mばかり掘り下げられていた。所々に土層観察用畦が残っていたが、その断面に漢代の埴積みの墓がみえていた。

午後、杭州市にある浙江省博物館に向かった。博物館は西湖(面積5.6km²)に突き出た孤山という小島の中にある。ひじょうに美しい湖で、我々が行った日は観光客で賑わっていた。

博物館は広大で、全てを見学することは時間の制約もあり、とても無理である。そこで、私は西晋や東晋の越州窯青磁が展示されているコーナーを中心に見学した。東晋の碗は、底部が小づくりであったことが印象的であった。

次いで、南宋官窯博物館を見学した。この博物館は西湖からひと山隔てた所にあり、銭塘江にほど近い。バスでトンネルを通ったが、そこを通る時、村人が管理する「関所」があり、通行料を払ったのであった。

1985～1986年の発掘により、南宋時代の官窯(青磁)が発見された。その地に博物館が建設されている。展示室は3つである。第1展示室は新石器時代からの代表的な陶器を置いてある。第2展示室は南宋官窯の出土品を置き、第3展示室では唐・宋代を中心とした陶器を置いてある。

これらの展示室から100mほど歩いた所に、製作工房跡と窯があり、覆屋によって保存されている。工房跡は建物跡や粘土を置いた所であり、窯は龍窯と呼ばれる長大な登り窯である。

ここで良かったのは発掘当時のまま遺構が保存されていたことと、中国では珍しく破片資料が展示されていたことである。これによって南宋官窯前期が薄胎薄釉瓷(胎土が薄手で、その上に1mm以下の薄い釉がかけられている)で、後期が薄胎厚釉瓷(薄い胎土で、釉は1mm以上と厚い)ということが実見できた。

なお、なぜ官窯と判明したのかというと、出土品の中に“官”と刻まれていたからだ、残念ながら実物が展示されていなかった。

この日は西湖遊覧を予定していたが、その時間がなく省略した。

夜、西湖近くのホテルに滞在した。このホテルの近隣の通りが夜店で一杯になるというので出かけてみた。通りの真ん中に衣服や古陶磁や金属器などが屋台の上に所狭しと並べてあった。客は多く、すんなりと通り抜けられないほどであった。龍泉窯青磁や定窯などと名札をつけた代物もあったが、その多くは本物とは思えなかった。売り手と買い手の知恵比べを楽しんだ散策であった。

その後、ホテルから車で別荘地のような会食場へ移動した。実は、そこで浙江省文物考古研究所の劉軍所長と方向明館員と共に会食することになっていたからである。会食の前に辻田添乗員の計らいで、所長との質疑応答の場面が設定された(一部のみ記載)。

問. 河姆渡文化と馬家浜文化は炭素14測定によると、いずれも約7,000年前とされているが、文化の違いはどう考えているのか。

答. 钱塘江という大河を境として、以北を馬家浜文化と考え、以南を河姆渡文化と考えている。ただし、中国全体ではいろいろな意見がある。

問. 文化の違いについて、その基準は何で決めているのか。

答. 土器の特徴で決めている。特に釜の形の違いは注目している。

問. 良渚文化では玉器が多く使用されているが、その生産地はどこなのか。

答. 浙江省内には生産地はなく、江蘇省溧陽にはあるようだ。

問. 玉器には精巧な彫り物が施されているが、これはどんな道具でしているのか。

答. サメの歯でしたのではないか。墓の中で見つかっている。

質疑応答は劉所長・方館員ともに丁寧に接していただき、なごやかな雰囲気の中で会食は終了した。

11月5日 杭州から紹興・余姚を経て河姆渡へ向かった。バスで移動したが、途中の道は工事中ばかりで、大変な悪路であった。午前中大きくバウンドする車中に閉じこめられていたので腰が痛くなったほどであった。このため、予想以上に時間がかかり、昼食時に午後の行程を検討した。バスの運転手が言うには上林湖青磁窯と河姆渡遺跡の両方を見学することは、この悪路なのでとても無理、どちらか一方にして欲しいとのことである。大橋団長以下3役が集まり検討した結果、1対2で上林湖青磁窯をあきらめることとなった。おそらく、全員に聞けば1対13であっただろう。なぜなら、今回研修の目玉が河姆渡遺跡見学であったからだ(ただし私の希望は上林湖青磁窯であった)。

河姆渡博物館では、副館長の趙さん(女性)に案内していただいた。流暢に日本語を操っていたが、独学ということであった。

河姆渡遺跡は1970年代に2,800㎡発掘され、新石器時代の古い段階(7,000年前)に米を栽培していたことが確認された。土層は4層確認され、炭素14の測定により1層は4,700~5,200B.P.、2層は5,500~5,800B.P.、3層は5,900~6,400B.P.、4層は6,500~7,000B.P.という結果が出されている。

発掘によりたくさんの動植物が確認された。一部を掲げるとゾウ・サイ・サメなどで、米はインディカやジャポニカである。なお、大振りの柱も見つかっている。

博物館の外見は日本の竪穴式住居や神殿建築を思わせるものであった。遺跡は、博物館から歩いて数分のところにあり、発掘区がわかるように保存されていた。河姆渡の名の由来は渡し場(船着き場)が近くにあったため、現在でも運行していた。

なお、我々が博物館に到着して1時間ほどして、江坂輝彌氏が来館された。このため、氏と共に特別に、実物を保管している場所に案内していただき、見学することができた。

11月6日 午前中は寧波にある保国寺を見学した。バスで到着した時間が早かったためまだ寺への通用門が開いていないほどであった。通用門を開いていただき、数分バスで山道を登った。冷気を感じるほど登った所で寺に着いた。

うっそうとした木立の中にある保国寺は、唐代に創建されたという。大殿は釘を一本も使わず組み立てている。北宋時代に建造された大雄宝殿は国の重点文物保護対象であるという。

次いで、明代の図書館である天一閣を訪れた。この中に石碑が展示されていた。そのひとつに「日本国大宰府博多津・・・」というものがあった。これは、博多に居住していた黄氏が寧波の路一丈を功德したという内容である。宋代のものと思われるが、日中の親密な関係を示す資料である。

これで、長江下流域の見学は終了した。この地域の広大さ、その大地に稲が稔った様を見た時、中国の底力を感じることができた。また、多くの人々が工事に従事する様や人々をかき分け車が進む様を見た時も底知れぬパワーを感じた。しかし、これは中国南部の現状であるかも知れない。

寧波空港では頼んでおいた弁当を食べた。中国でも日本的な「ホカ弁」風のものを作り始めたらしい。ここで、初日からずっと添乗していただいた方向明館員と別れた。氏は真摯に我々の質問に応じていただいた。今後の御活躍を祈る。

午後、北京に到着。空港は広大であった。ここから北京の中心部まで高速道路で向かった。高層アパートが林立した様は壮観であった。ところで、中国南部の建物はレンガを積みたもので、高層ホテルを建設していたが、北京でもそうなのだろうか。地震には弱いのだが・・・。

さて、北京到着後、天壇公園を見学した。明・清代の皇帝が五穀豊穡を祈った場所である。梁と釘を一本も使用せず建築された祈年殿は壮観である。到る所に大理石を使用しているが、これらは50kmほど離れた場所から切り出したものという。階段は9段で、中国では最上の数字という。

11月7日 故宮博物院を見学した。明の永楽帝が15年の歳月を費やして1420年に完成した。以

後、ラストエンペラーまで皇帝がここで暮らした。面積は72万㎡で9,999の部屋があるという。しかし、広大で、また首が痛くなるほど見上げる基壇の上に建物をつくるというスケールの大きさに圧倒された。あまりにも広すぎるので、全体を見学することはできず、もっとも東側の展示を見るコースを選択した。青銅器が展示されている場所と陶磁器の部屋を見学した。時間的な制約があり、ごく一部しか見学できなかったことは残念であった。

昼は琉璃^{るりちやん}廠へ行った。東西750mの通りに書画、文房四宝、骨董などの専門店があり、ここで買物をした。

その後、明の十三陵を見学した。バスで1時間はかかっただろうか。まず、樓門へ行き、参道を歩いた。この両側に象・馬・ラクダなどの石像が据えられていた。

次に唯一発掘された定陵(第14代神宗万曆帝)を見学した。地下に遺体が安置されていたそうである。そこへ至る入口は当初は封鎖されており、発掘当初はわからなかったのであるが、1つの標石が発見され、入口が判明した。磚積みの地下室は高さ10mほどもあり、地下宮殿を思わせるほどであった。発掘によって密閉された部屋が開放され、この空気の変動により遺体その他は朽ち果ててしまったという。

11月8日 最後に北京大学の博物館を見学した。蘇哲先生に案内していただいた。各時代の遺物が年代順、及び地域順に整然と展示されており、特に新石器時代の文化様相について理解しやすかった。土器の器形の違いが各文化とも明瞭であった。

夕方、関西新空港に到着し、空港にて解散した。全員無事で何よりであった。今後、この研修の成果を個々に文章化することを誓った。これについてはその後、全員執筆による小冊子を作成したのであった。

なお、この研修の間、大橋団長や大谷秘書長をはじめ、14名がひとつにまとまって活動することができた。それぞれの参加者の協力が大きかったといえよう。副団長としてここに記して感謝したい。(文責 伊野)

(いの・ちかとみ=当センター調査第2課調査第1係長)

(たけい・はるお=当センター調査第2課調査第1係主査調査員)

(いしお・まさのぶ=当センター調査第2課調査第1係主査調査員)

(くろつば・かずき=当センター調査第2課調査第1係主査調査員)

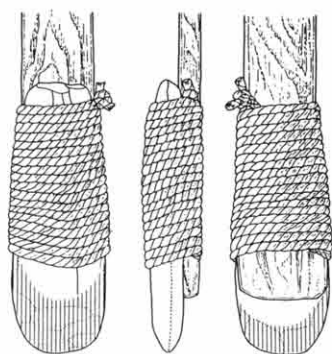
誌 上 遺 物 展 示

2. 桑飼下遺跡の打製石斧

概要 農耕化の過程は、人類史の重要課題の一つである。ところが、農耕化の過程は、図式的に理解できるほど単純ではない。狩猟採集による社会と農耕の技術を持った社会との間の相違点は何か。それがまた、歴史認識の上で、いかに位置づけられるかは、一筋縄ではいかないのが現状である。かつて、英国の考古学者チャイルドは、農耕・牧畜の技術の獲得と、それによる生産様式の変革に、「新石器革命」の名を与えた。だが、現在では、農耕化は革命という急激な過程ではなく、混合農耕などの漸移的な段階を経たものであることが明らかになっている。

さて、縄文時代は、土器や弓矢などの新石器時代の文化要素は持っているが、晩期の一部を除いて、農耕は行っていないのが通説である。農耕は、弥生時代からで、縄文晩期的な土器を持ちつつも、農耕を行っている過渡的な時期を弥生早期と呼ぼうという見解もある。したがって、わが国では農耕の開始から国家成立までのスピードが世界史的にも異例に速いという特質がある。だが、縄文時代晩期以前には、農耕は全く行われていなかったのであろうか？そうではなく、縄文時代に農耕の可能性を想定する縄文農耕論が提唱されている。舞鶴市地頭に所在する桑飼下遺跡も農耕の可能性が示唆される遺跡の一つである。

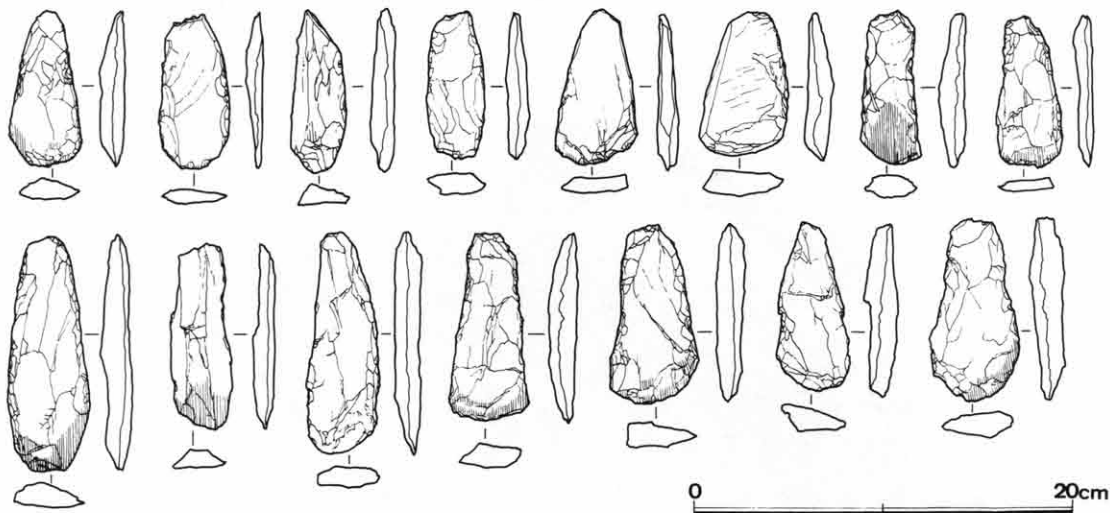
桑飼下遺跡の発見は、昭和30年代に郷土史家杉本嘉美氏によって由良川河床から縄文土器が引き上げられ、岡田由里遺跡として報告されのが端緒である。当時、由良川ではドレッチャーによる川砂利採取が行われ、由良川河床に縄文遺跡が眠っている可能性が指摘されていたのである。これを受けて、当時、平安博物館の助教授であった渡辺誠氏によって、3次にわたる発掘調査が実施された。その成果は、桑飼下式と名付けられた後期前半の多量の土器、および1,300点余りの石器が検出された。その石器のうち、77%を占める942点もの出土をみたのが、ここで紹介する



第1図 打製石斧の復原装着図
(参考文献1から)

る打製石斧である。

打製石斧とは、梯子型の偏平な石材の側縁を調整したものだが、木材の伐採や加工に供した磨製石斧とは全く異なる用途に用いられたものである。第1図に示したように木の先端に結わえ付けて、土掘り具として使用されたい。その目的は、クズ・ユリネ・カタクリ・テンナンショウなどの根茎類の採取であったようだ。この遺跡が立地する自然堤防上は、肥沃な土壤に覆われており、根茎類の採取が生業活動の重要な部分を占めていたことを物語っている。

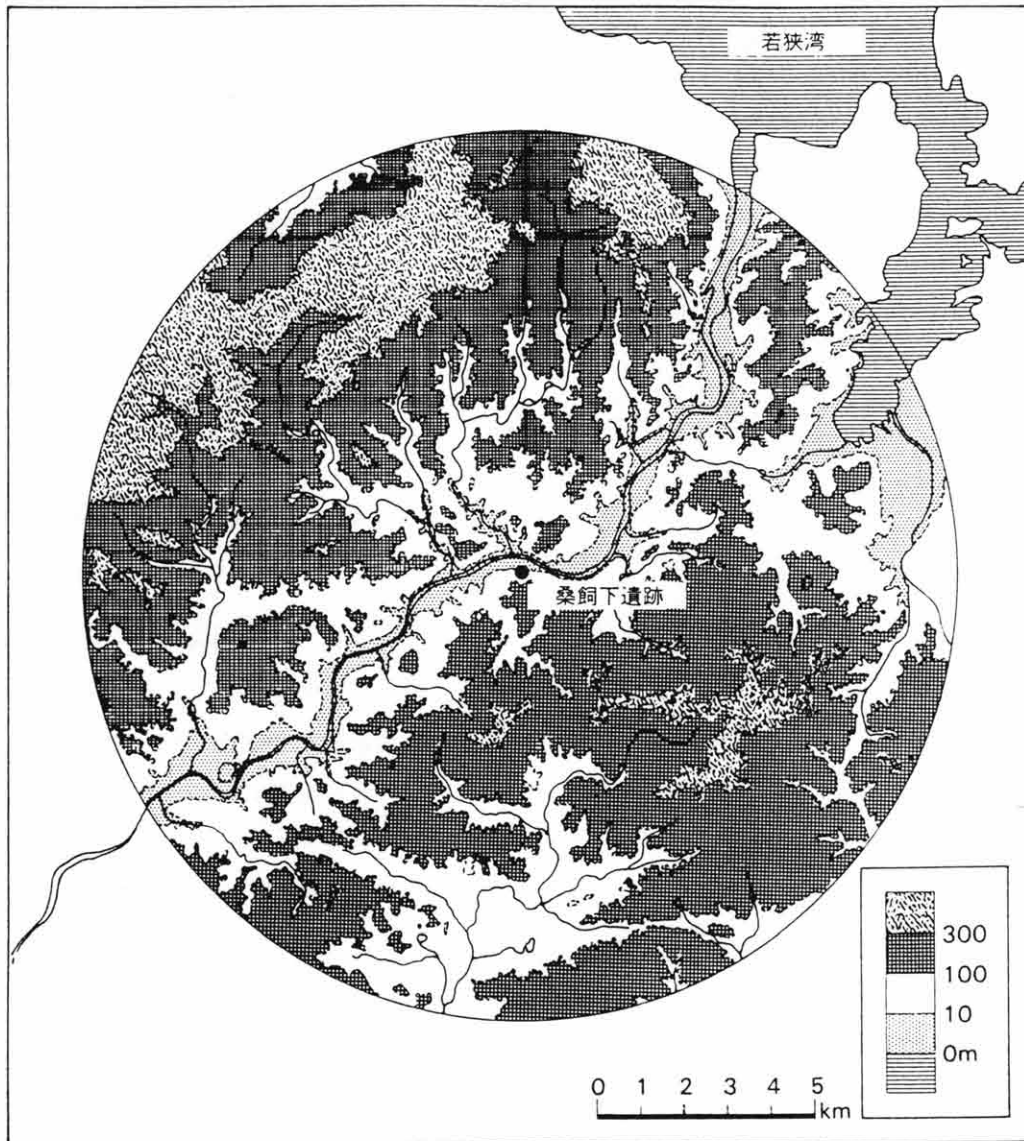


第2図 桑飼下遺跡出土の打製石斧実測図(参考文献1を再トレース)

意義 ところで、打製石斧の出土は、近畿地方ではむしろ少なく、中部高地で卓越する。かつて、藤森栄一氏はこの地域に豊かに展開する縄文時代中期の文化を前提として、縄文農耕論を展開した。縄文農耕論には、晩期農耕論・後期農耕論・中期農耕論の別があるが、中期農耕論の根拠の一つに打製石斧があげられ、有用植物の採取のための、栽培管理に用いられたとした。近年の発掘調査の進展によって晩期に農耕が行われていたことが確実となったが、中期農耕論は、提唱時の強硬な反対論もあって、承認されたとはいえない。

しかし、桑飼下遺跡の多量の打製石斧は、それ以前の生業とは明らかに一線を画するものであると考えられる。それを調査者の渡辺誠氏は、「桑飼下型経済類型」と名付けた。これは、自然堤防上に立地する縄文遺跡において、河川での漁労、丘陵地での狩猟と同時に、自然堤防上での原初的な植物栽培を行っていたというものである。そもそも、桑飼下遺跡を中心とする半径10kmを描いた遺跡活動圏は、ほぼ90%が標高10m以上の地域であり、残りは沖積低地と自然堤防から構成されている。また、わずかにこの圏内に含まれる舞鶴湾は、由良川とは別の流域で、積極的な活動が及んだとは認められない。つまり、桑飼下型経済類型とは、森林生態系に潜在的に含まれる、動・植物資源の開発を目的とした、縄文人の適応戦略の一類型に他ならないのである。さらにその経済類型は、縄文後期に、東北日本から伝播し、主体的に受容されたものだという。桑飼下遺跡で検出された多量の打製石斧は、小地域的な現象ではなく、近畿地方の縄文文化における生業の転換を物語るものなのである。

桑飼下経済類型についての議論は、その後の北近畿での縄文遺跡の調査が少ないこともあって、東北日本からの影響で新たな経済類型が出現したか否かの検証する手立てが無かった。しかし、平成8年度に調査された丹後町平遺跡の調査で、縄文時代の他地域との波状的な交流が明確となった。それによれば、中期前半・後期末～晩期初頭に北陸からの土器の流入が顕著となり、中期末には平式(平CⅢ式)土器という独自性の強い型式が広汎に展開する。桑飼下遺跡が盛行する後期前半は平遺跡では空白の時期であるが、海洋資源を開発し、海洋への適応が生業基盤となる平



第3図 桑飼下遺跡の遺跡活動圏(参考文献2から)

式土器の後に桑飼下型経済類型が成立するのは非常に示唆的である。この平式土器から桑飼下式への変遷の中に、北近畿の縄文文化の動態を読み解く鍵が潜んでいるように思われる。

(河野一隆)

<参考文献>

1. 渡辺 誠編『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』 京都府舞鶴市教育委員会 1975
2. 高松龍暉・千葉 豊・大下 明ほか『小森岡遺跡』 兵庫県城崎郡竹野町教育委員会 1990

府内遺跡紹介

79. 天塚古墳

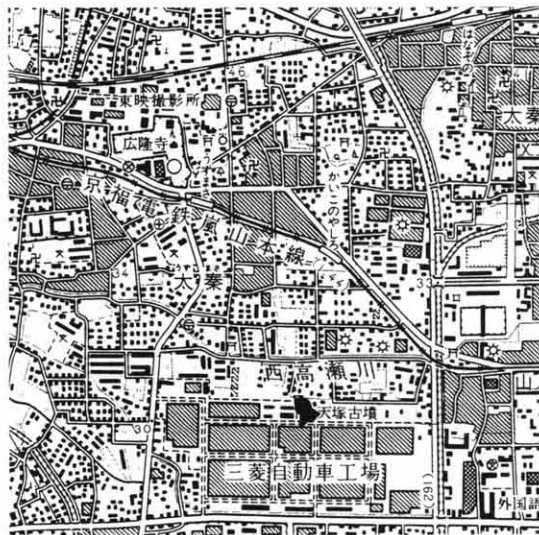
天塚古墳は、京都市右京区太秦松本町にあって、南方には桂川東岸の沖積平野が広がっている。隣接するところには、横穴式石室が内部主体と推定されている、全長約60mの清水山古墳が存在していたが、現在はすでに残存していない。また、この古墳の近くには、蛇塚古墳・仲野親王陵古墳などの前方後円墳が存在しており、いわゆる嵯峨野古墳群の一つといわれている地域で、古墳が比較的多く分布する地域でもある。

その中で、天塚古墳も、近くに存在する古墳と同じく、墳形は前方後円墳で、二段築成となっている。規模的には、嵯峨野古墳群の中では蛇塚古墳に次ぐ規模をもっている。全長は約71mあり、前方部幅約58m・高さ約8.4m、後円部径約45.5m・高さ約8mを測る。そのため、形態から見れば、立面の形は、前方部幅が後円部の径よりも大きくなっており、主軸の方向はほぼ南面している。また、横からみると、後円部の高さよりも前方部の高さの方が大きくみえるように築造されている。天塚古墳では、本格的な発掘調査は実施されていないが、1900年に遺物が当時の京都帝室博物館に寄託された際、濱田耕作が現況の調査を行っている。また、報告としては、大正年間に梅原末治が当時の状況をまとめて報告している。その後、1966年には京都大学考古学研究会が御堂ヶ池古墳群の調査を行った際に、その周辺に存在する古墳の測量調査などを実施している。そのときに、天塚古墳や清水山古墳の簡単な概要を中心に報告されている。

これらの調査報告によれば、天塚古墳の主体部は、主として二つの横穴式石室からなっている。一つは、後円部にあって、北西方向に開口する無袖式の石室である。もう一つは、くびれ部にあって、南西方向に開口する片袖式の石室である。二つの横穴式石室の主軸の方向は、約90°の角度があり、二つの石室は平行しては築かれていないことがわかる。

現在は、墳丘上には円筒埴輪や葺石は認められない。しかし、1900年に濱田耕作が調査したときに円筒埴輪の破片を採集したことからすれば、二段ともに円筒埴輪をめぐらせていた可能性がある。

前方部の中央と後円部の東側には窪んでいる



遺跡所在地 (1/25,000)

ところがあって、ここには上に記した横穴式石室以外にも埋葬施設があったことが推定されている。ただ、いずれも墳頂部から2m程度に達しているため、埋葬施設以外の可能性もあるかもしれない。

墳丘には埴輪がめぐっていたことが推定されている。墳丘の周囲の水田には、周溝の存在した痕跡が残っており、相当な規模の古墳であったことがわかる。この古墳には陪塚が存在したらしく、水田の畦の一部に痕跡が見られる。

次に、横穴式石室であるが、現在確認されている二つとも、稲荷社が設けられている。この稲荷社は、白清稲荷とも呼ばれている。後円部の方の無袖式石室の奥壁の状況は、この稲荷社が存在するため、特に詳しくは報告されていない。ただ、側壁については、小さめの石が乱雑に積み重なったようになっている。現在は、相当補修を受けているようで、石室の前の方ほど、補修が著しく、すでに1966年の段階でも原形をとどめていないと報告されている。石室の天井石は4枚と、比較的大型の石が用いられている。全長約8.1m・最大幅約2.3mを測る。

それに対して、くびれ部の片袖式横穴式石室もほとんど同様の状況で、奥壁の詳細はわかっていない。側壁の状況は、後円部の横穴式石室と同様の石の積み方で、残り具合も良好と報告されている。ただ、奥壁と側壁の境目あたりの石は、少し小さくなっているようで、天井石も6～7枚と、後円部の横穴式石室よりも小さめの石を用いている。全長約7.7m・玄室長約4.7m・幅約1.8mを測る。

次に、出土遺物であるが、これまでに確認されたものだけで、各種類に及んでいる。須恵器・器台と広口壺、仿製の銅鏡、連珠金銅製品、玉類、甲冑の小札、鉄鏃、鉄剣片、馬具類などが主なものである。これは、1887年に出土したと伝えられ、現在、京都大学総合博物館に所蔵されているが、どのような出土状況であったかは、全く知ることができない。

ただ、これらの遺物のうち、須恵器の年代観から見て、天塚古墳はほぼ6世紀前半頃に築造されたことが推定されている。隣接する清水山古墳が6世紀初頭の築造と推定されていることからすれば、それに次いで築造されたこの地域の首長墓の可能性が高い。

(土橋 誠)

<参考文献>

- 梅原末治「太秦村天塚及び清水山古墳」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第三冊 京都府) 1922
京都大学考古学研究会「天塚・清水山両古墳について」(『第17とれんち』別冊1 京都大学考古学研究会) 1966
『京都大学文学部考古学資料目録』第2部 京都大学文学部 1968
『嵯峨野の古墳時代—御堂ヶ池群集墳発掘調査報告—』 京都大学考古学研究会 1971
『史料京都の歴史』2 考古 平凡社 1983

長岡京跡調査だより・62

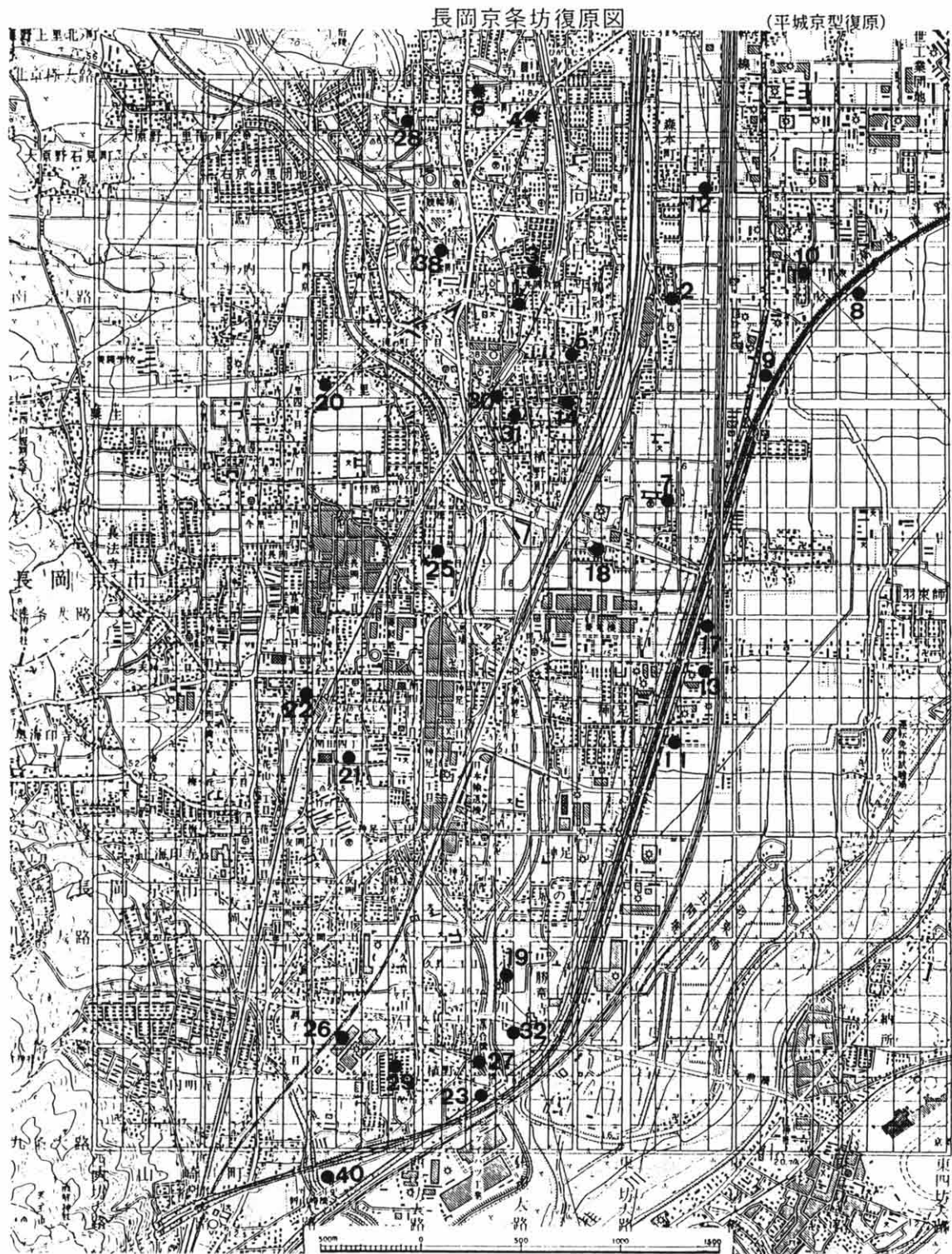
前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成9年5月28日、6月25日、7月23日に開催された。

報告のあった長岡京の発掘調査は宮内7件、左京域11件、右京域14件であった。京外の8件を併せると40件となる(調査地一覧表と位置図を参照)。このうち、左京第399次(B-6・B-7地区)の調査結果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1997年7月末現在)

番号	調査回数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第343次	7ANEHJ-3	向日市鶏冠井町祓所41-18	(財)向日市埋文	3/3~4/26
2	宮内第346次	7ANEDN-5	向日市鶏冠井町大極殿18-6	(財)向日市埋文	4/10~4/14
3	宮内第347次	7ANEDN-6	向日市鶏冠井町大極殿40-18他	(財)向日市埋文	4/14~5/9
4	宮内第348次	7ANBUK	向日市寺戸町梅ノ木3-2・5	(財)向日市埋文	5/8~7/5
5	宮内第349次	7ANEIN-2	向日市鶏冠井町稲葉25-16	(財)向日市埋文	6/20~7/4
6	宮内第350次	7ANBNC-4	向日市寺戸町中垣内19-1	(財)向日市埋文	7/3~
7	宮内第351次	7ANDST-4	向日市森本町森本30番地	(財)向日市埋文	7/22~
8	左京第399次	7ANVKN-11 7ANVST-7	京都市南区久世東土川町金井田・正登	(財)京都府埋文	4/7~
9	左京第400次	7ANEMR-4	向日市鶏冠井町南金村	(財)京都府埋文	5/1~7/末
10	左京第401次	7ANVNR	京都市南区久世東土川町地内	(財)京都市埋文	4/23~
11	左京第402次	7ANMMO-6・ MTD-4	長岡京市神足寺田1番地	(財)長岡京市埋文	5/12~7/30
12	左京第403次	7ANDHC-6	向日市森本町東ノ口31番地	(財)向日市埋文	5/15~5/22
13	左京第404次	7ANLMD-2	長岡京市馬場給田6番地	(財)長岡京市埋文	5/26~
14	左京第405次	7ANFMM-7	向日市上植野町円山15-23	(財)向日市埋文	5/27~6/10
15	左京第406次	7ANMNB-2	長岡京市神足七ノ坪19・20	(財)長岡京市埋文	6/26~
16	左京第407次	7ANMTD-4	長岡京市神足寺田1番地他	(財)古代学協会	7/1~
17	左京第408次	7ANFHD-7	向日市上植野町菱田15	(財)向日市埋文	7/3~7/8
18	左京第409次	7ANFBD-5	向日市上植野町伴田12-1	(財)向日市埋文	7/10~
19	右京第562次	7ANQMH-2	長岡京市勝竜寺巡り原16-1他	(財)長岡京市埋文	2/13~5/9
20	右京第564次	7ANIAC-4	長岡京市今里畔町22-1他	(財)長岡京市埋文	3/17~4/25
21	右京第565次	7ANKNT-5	長岡京市開田四丁目611-3	(財)長岡京市埋文	4/8~5/23
22	右京第566次	7ANKNZ-6	長岡京市天神一丁目32-1・34-1	(財)長岡京市埋文	5/21~7/2
23	右京第567次	7ANTDK-3	大山崎町下植野代理分7-5・2-4	大山崎町教委	6/10~6/25
24	右京第568次	7ANTKS-5	長岡京市井ノ内小西40番地	大阪大学文学部考古学研究室	
25	右京第569次	7ANISD-2	長岡京市一文橋一丁目160-1	(財)長岡京市埋文	6/23~7/4
26	右京第570次	7ANRHM-3	長岡京市調子三丁目1-1	(財)長岡京市埋文	7/7~
27	右京第571次	7ANTNT	大山崎町下植野二階下9・10	大山崎町教委	6/24~7/1
28	右京第572次	7ANBNO-4	向日市寺戸町西野6-3	(財)向日市埋文	7/2~7/15
29	右京第573次	7ANTMK-8	大山崎町下植野宮脇1-51	大山崎町教委	7/4~7/7
30	右京第574次	7ANFNM-6	向日市上植野町野上山16-31他	(財)向日市埋文	7/7~
32	右京第576次	7ANQNT-3	長岡京市勝竜寺二ノ坪9番地	(財)向日市埋文	7/22~



番号は一覧表・本文 () 内と対応

調査地位置図

34	山城国府跡第45次	7XYMS' FH-12	大山崎町藤井畑21-1	大山崎町教委	4/21~4/28
35	山城国府跡第46次	7XYS' FH-13	大山崎町字大山崎小字藤井畑21-1	大山崎町教委	5/30~6/18
36	久々相遺跡第3次	7ANBKG-3	向日市寺戸町久々相17-2	(財)向日市埋文	5/19~5/28
37	中海道遺跡第46次	3NNANK-46	向日市物集女町御所海道2-3・3-6・41-2	(財)京都府埋文	5/19~7/10
38	立会調査第97048次	7ANCKM	向日市向日町北山30-9	(財)向日市埋文	6/6
39	金原寺跡第1次	-	長岡京市金ヶ原金原寺9-4	(財)長岡京市埋文	6/9~7/8
40	下植野南遺跡	-	乙訓郡大山崎町円明寺門田地内	(財)京都府埋文	7/上(予)~

左京第399次(8)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

今回の対象地は、中央自動車道西宮線の都市内にあたる部分(名神関係遺跡桂川PA工区・調査面積は7,000m²)で、この調査は平成5年度から引き続き実施している。B-6地区は、左京南一条四坊四町(二条四坊二町)、南一条大路(二条条間大路)北側溝にあたる。また、B-7地区は、左京二条四坊一町(二条四坊三町)、南一条大路(二条条間大路)南側溝にあたり、いずれも東土川遺跡の中に含まれる。

今回の調査を通じて、現在までに長岡京期の南一条大路(二条条間大路)南北両側溝、掘立柱建物跡を検出している。また、南一条大路北側溝からは長岡京期の土器群がまとまって出土した。

このほか、調査地北西の南一条大路南側溝西端上で検出した土坑から印章が出土した。これは、印面には『福』の文字が陽刻され、蒼鈕有孔の形状となっている。平安時代中期のものと推定される。

過去、浦入遺跡では「笠百私印」と押印された製塩土器の底部や、長岡京跡左京第118次調査で木印が出土したことがあるが、今回の印章がどのように用いられたのか、その意味も含めて今後の解明が待たれる。

なお、今回の調査ではその他に、同時期と思われる井戸が1基検出された。

(米本光徳)

センターの動向(9.5～7)

- 1.できごと
5. 1 別荘古墳群(久美浜町)発掘調査開始
鶏冠井清水遺跡(向日市)発掘調査開始
- 6 棕ノ木遺跡(精華町)発掘調査開始
- 8 苗代城跡・相之目古墳(峰山町)発掘調査開始
- 8～9 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於：広島市)木村英男常務理事・事務局長、福嶋利範事務局次長、安田正人課長補佐出席
- 12 スガ町古墳群(網野町)発掘調査開始
- 16 職員研修(於：当センター)講師：辻本和美係長「報告書の作成について」
- 19 中海道遺跡(向日市)発掘調査開始
- 21～22 堤 圭三郎理事、浦入遺跡(舞鶴市)・苗代城跡(峰山町)ほか現地視察
- 22 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於：八尾市)木村英男常務理事・事務局長、杉江昌乃主事出席
- 23 芋野城跡(弥栄町)発掘調査開始
- 24～25 日本考古学協会総会(於：東京・立正大学)岡崎研一主査調査員、有井広幸・八木厚之調査員出席
- 27 佐山遺跡(久御山町)発掘調査開始
- 28 長岡京連絡協議会
6. 2 余部遺跡(亀岡市・府道)発掘調査開始
- 3 木村英男常務理事・事務局長、長岡京跡左京第399次調査・東土川遺跡ほか現地視察
- 12～13 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(於：東京)木村英男常務理事・事務局長、福嶋利範事務局次長、安田正人課長補佐出席
- 16 同和問題職場研修1(於：当調査研究センター)
- 17 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：草津市)辻本和美係長出席
木津城跡(木津町)発掘調査開始
- 19 相之目古墳発掘調査終了(5.8～)
- 20 監事監査
- 23 宮ノ背遺跡(八幡市)発掘調査開始
- 25 長岡京連絡協議会
- 26 第50回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事・事務局長、川上 貢、上田正昭、佐原 眞、足利健亮、堤 圭三郎、梅野 宏、西山隆史、中谷雅治の各理事、京極隆夫監事出席
- 28 第79回埋蔵文化財セミナー(於：舞鶴市)開催(別掲)
7. 1～2 木村英男常務理事・事務局長、浦入遺跡・苗代城跡ほか現地視察
- 1 芋野城跡発掘調査終了(5.23～)
余部遺跡(亀岡市・農総研)発掘調査開始
- 4 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主催者会議(於：ルビノ京都堀川)木村英男常務理事・事務局長、福嶋利範・安藤信策事務局次長、小山雅人調査第1課長、水谷壽克課長補佐、米本光徳

- 主査調査員出席
- 谷垣古墳群(久美浜町)発掘調査開始
- 7 松ヶ崎遺跡(網野町)発掘調査開始
- 10 中海道遺跡発掘調査終了(5.19～)
- 11 天王山古墳群(久美浜町)現地説明会
- 15 都出比呂志理事、愛宕神社古墳群(峰山町)・苗代城跡ほか現地視察
- 16 鶏冠井清水遺跡関係者説明会
- 18 職員研修(於：当センター)講師：村田和弘調査員「奈文研研修報告—環境考古課程—」、平良泰久課長補佐「韓国・歴史と文化を訪ねて」
- 19 綾部市資料館特別展示「名探偵登場」開催記念パネルディスカッション(パネラー)小山雅人調査第1課長出席
- 23 長岡京連絡協議会
- 25 愛宕神社古墳群現地説明会
- 29 余部遺跡(農総研)関係者説明会
国際協力団体連絡会議(於：京都府女性総合センター)小山雅人調査第1課長出席
2. 普及啓発活動
- 6.28 第79回埋蔵文化財セミナー(於：舞鶴市)—縄文時代の丹後・丹波・山城—
河野一隆調査員「丹後町平遺跡の発掘調査」、吉岡博之舞鶴市教育委員会文化財保護係長「舞鶴市内の遺跡について—縄文時代を中心に—」、長谷川達京都府立丹後郷土資料館技師「京都府の縄文遺跡について」

(安藤信策)

受贈図書一覧(9.5~7)

苦小牧市埋蔵文化財調査センター	相原5遺跡
水沢市埋蔵文化財調査センター	水沢市埋蔵文化財調査センター所報 鎮守府 胆沢城、古代東北ワールド
多賀城市埋蔵文化財調査センター	第10回企画展 城柵の時代、多賀城市文化財調査報告書第42集 高崎遺跡、同第43集 新田遺跡、同第44集 市川橋遺跡、同第45集 山王遺跡、同第46集 小沢原遺跡、年報 平成7年度
(財)山形県埋蔵文化財センター	年報 平成8年度
(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査事務所	(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第13集 武田X、同第14集 船窪遺跡群
(財)千葉県文化財センター	千葉県文化財センター研究紀要17、研究連絡誌 第48、49号、千葉県文化財センター調査報告第314集 市原市西野遺跡第2次発掘調査報告書、同第315集 茂原市渋谷貝塚発掘調査報告書
(財)君津郡市文化財センター	平成8年度 袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書 西原遺跡、(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第93集 美生遺跡群Ⅱ、同第111集 泉遺跡発掘調査報告書、同第116集 寒沢古墳群・愛宕古墳群・寒沢遺跡・上用瀬遺跡発掘調査報告書、同第117集 大畑台遺跡群大畑台遺跡(C)発掘調査報告書
(財)総南文化財センター	(財)長生郡市文化財センター調査報告第32集 谷口遺跡・吹良遺跡、同第33集 大久保遺跡、同第34集 横山白山台遺跡、同第35集 土島田遺跡
(財)東京都教育文化財団 東京都埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター調査報告第37集 汐留遺跡Ⅰ、同第38集 多摩ニュータウン遺跡、同第39集 多摩ニュータウン遺跡、同第41集 多摩ニュータウン遺跡、資料目録9、尾張藩上屋敷跡遺跡発掘調査概要Ⅴ、汐留遺跡 旧汐留貨物駅跡地内遺跡発掘調査概要Ⅲ
(財)かながわ考古学財団	かながわ考古学財団調査報告15 宮ヶ瀬遺跡群Ⅸ、同16 宮ヶ瀬遺跡群、同22 原口遺跡Ⅰ、同28 芹沢配水池関連遺跡群、同29 青山開戸遺跡、『敷石住居の謎に迫る』記録集
(財)山梨文化財研究所	帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第8集、社口遺跡第3次調査報告書、大坪遺跡発掘調査報告書Ⅲ
(財)長野県埋蔵文化財センター	(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書22 篠ノ井遺跡群、同24 飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡・がまん淵遺跡ほか
(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団	新潟県埋蔵文化財調査報告書第73集 上ノ平遺跡C地点、同第75集 大堀遺跡
(財)富山市文化振興財団埋蔵文化財調査事務所	埋蔵文化財年報(8)、埋蔵文化財調査概要 平成8年度
金沢市埋蔵文化財センター	金沢市文化財紀要130 安江町遺跡、同131 金沢市松寺遺跡(第2次)、同132 金沢市本町一丁目遺跡Ⅱ、同133 戸水遺跡群、同134 平成8年度金沢市埋蔵文化財調査年報
(財)愛知県埋蔵文化財センター	愛知県埋蔵文化財情報12、年報 平成8年度
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第13集 品野西遺跡、同第14集 落合橋南遺跡Ⅰ、同第15集 太子A窯跡、平成8年度 瀬戸市埋蔵文化財センター年報
松阪市文化財センター	新田町遺跡・阿形遺跡・皆鍋遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書
(財)滋賀県文化財保護協会	ほ場整備事業関係遺跡発掘調査報告書XXⅠ-8 蔵ノ町遺跡、同XXⅡ-1 今川東遺跡、同XXⅡ-7 後川遺跡、八坂東遺跡、日置前遺跡Ⅰ、レトロ・レトロの展覧会1997、小野遺跡発掘調査報告書
(財)大阪府文化財調査研究センター	河内平野遺跡群の動態Ⅴ、大阪文化財研究 第11号、第36回大阪府下埋蔵文化財研究会資料集
(財)大阪市文化財協会	広島藩大坂蔵屋敷跡、天満本願寺跡発掘調査報告Ⅱ、長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅸ、同X
(財)交野市文化財事業団	交野市埋蔵文化財調査報告1996-Ⅱ 森遺跡Ⅴ、同1996-Ⅲ 森遺跡Ⅵ

(財)八尾市文化財調査研究会	平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告、(財)八尾市文化財調査研究会報告52 萱振遺跡、同53、同54
(財)枚方市文化財研究調査会	枚方市文化財年報18(1996年度分)、研究紀要第4集
高槻市立埋蔵文化財調査センター	高槻市文化財年報 平成7年度、高槻市文化財調査概要X X III 嶋上遺跡群21
(財)鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター	鳥取県教育文化財団調査報告書49 長瀬高浜遺跡Ⅶ、同50 鶴田墓ノ上遺跡・鶴田大道端遺跡・鶴田中峯山遺跡、同51 坂長宮田ノ上遺跡・坂中第5遺跡・坂長佛谷遺跡・小町越城野原第1遺跡・小町越城野第2遺跡、同52 小町石橋ノ上遺跡、同53 天萬土井前遺跡
(財)鳥取市教育福祉振興会 埋蔵文化財調査センター 鳥根県埋蔵文化財調査センター	岩吉遺跡Ⅳ、西大路土居遺跡Ⅱ、平成8年度桂見遺跡群発掘調査概要報告書、史跡鳥取城跡附太閤ヶ平天球丸保存整備事業報告書 徳見津遺跡・日廻遺跡・陽徳寺遺跡、岩屋口北遺跡・白コクリ遺跡(F区)、柳Ⅱ遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡、岸尾遺跡・島田遺跡、洪山池遺跡・原ノ前遺跡、福富Ⅰ遺跡・屋形1号墳、松本古墳群・大角山古墳群・すべりごこ古墳群、布志名大谷Ⅰ遺跡・布志名大谷Ⅱ遺跡・布志名才の神遺跡、斐伊川放水路発掘物語 P A R T 3、檀原遺跡・谷川遺跡・殿淵山毛宅前跡、かんの流れ、嘉久志遺跡・飯田C遺跡・古八幡付近遺跡、よみがえるあさくみがわのながれ、本庄川流域条里遺跡
鳥根県古代文化センター	古代出雲文化展 神々の国 悠久の遺産
岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116 津寺遺跡4、同120 窪木遺跡1、同121 藪田古墳群・金黒池東遺跡・奥ヶ谷窯跡ほか
倉敷埋蔵文化財センター	年報3 平成7(1995)年度、池尻遺跡 倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第6集
(財)徳島県埋蔵文化財センター	年報Vol. 6 平成6年(1994)度、徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第9集 黒谷川宮ノ前遺跡、同第15集 中島田遺跡Ⅱ
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	年報 平成7年度、同平成8年度、川津一ノ又遺跡、国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成8年度、旧練兵場遺跡、県道関係埋蔵文化財発掘調査概報平成8年度、高松城跡(西の丸町)・西打遺跡、小谷窯跡・塚谷古墳、空港跡地遺跡発掘調査概報平成8年度、丸山窯跡平成8年度、研究紀要Ⅴ
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター	埋蔵文化財調査報告書第64集 石手寺前遺跡
(財)松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター	松山市文化財調査報告書第57集 小野川流域の遺跡、同第58集 桑原地区の遺跡Ⅲ、同第59集 中村松田遺跡
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第24集 小籠遺跡Ⅱ、同第25集 長畝古墳群、同第26集 須崎道路(吾井郷地区)埋蔵文化財確認調査報告書
小樽市教育委員会 仁木町教育委員会 平取町教育委員会	文庫歌遺跡Ⅱ 平成8年度小樽市埋蔵文化財調査概報 モンガクB遺跡 平取町文化財調査報告書Ⅴ オバウシナイ遺跡、同Ⅵ みどりが丘1遺跡・平取桜井遺跡、同Ⅶ ベナコリ1遺跡、同Ⅷ 二風谷遺跡
平賀町教育委員会	平賀町埋蔵文化財報告書第21集 石郷(1)遺跡発掘調査報告書、同第22集 大光寺新城跡遺跡
仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書第205集 野川遺跡、同第208集 富沢・泉崎浦・山口遺跡(9)、同第212集 平成7年度 年報17、同第215集 郡山遺跡XⅦ、同第216集 仙台平野の遺跡群XⅥ、同第224集 平成8年度 年報18
米沢市教育委員会	米沢市埋蔵文化財調査報告書第54集 遺跡詳細分布調査報告書第10集、同第55集 台ノ上遺跡発掘調査報告書
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財調査報告第109集 小倉水神社裏遺跡・水木東遺跡、同第124集 山海道遺跡、同第143集 三輪仲町遺跡、同第169集 下野国分寺跡XⅡ(瓦・本文編)、同第180集 西裏遺跡、同第186集 那須官衙関連遺跡Ⅳ、同第189集 八幡根遺跡、同第190集 横倉戸館遺跡、同第191集 外城遺跡(鷲城跡)、同第192集 間々田地区遺跡群Ⅰ、同第193集 温泉神社北遺跡、同第195集 戸木内遺跡(第4次調査)、同第198集

吉井町教育委員会	栃木県埋蔵文化財保護行政年報19 平成7年度(1995)、研究紀要 第5号
大宮市教育委員会	長根遺跡群発掘調査報告書、平成8年度 町内遺跡発掘調査報告書 大宮市文化財調査報告第43集 東北原遺跡(第11次調査)、大宮市遺跡調査会報告第58集 側ヶ谷戸貝塚第2次調査
鳩山町教育委員会	鳩山町埋蔵文化財調査報告書第18集 町内遺跡 I
市原市教育委員会	平成8年度 市原市内遺跡発掘調査報告
東金市教育委員会	平成8年度 東金市内遺跡発掘調査報告書
木更津市教育委員会	中尾遺跡群発掘調査報告書Ⅲ、大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅱ、千束台遺跡群発掘調査報告書Ⅲ 塚原21号墳、塚原遺跡・野焼B遺跡
富津市教育委員会	平成8年度 富津市内遺跡発掘調査報告書、平成8年度萩ノ作遺跡発掘調査報告書
袖ヶ浦市史編さん事務局	平成8年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書、袖ヶ浦市向山野B遺跡発掘調査報告書
東京都教育庁	学芸研究紀要 第13集
北区教育委員会	北区埋蔵文化財調査報告第21集 御殿前遺跡V、同第22集 下十条遺跡、中里貝塚
小田原市教育委員会	小田原市文化財調査報告書第61集 中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書、同第62集 御長屋跡第Ⅰ地点、同第63集 物見塚古墳発掘調査報告書、同第64集 平成6年度 小田原市緊急発掘調査報告書
海老名市教育委員会	瓢箪塚古墳一上浜田古墳群第7号墳一発掘調査報告書
相模原市教育委員会	橋本遺跡、横山5丁目遺跡、勝坂遺跡第47次調査、大島上ノ原遺跡、相模原市No.27遺跡発掘調査、相模原市No.195遺跡発掘調査
岡谷市教育委員会	梨久保・西垣外・郷田・海戸遺跡発掘調査報告書(概報)
佐久市教育委員会	佐久市埋蔵文化財年報5 平成7年度、佐久市埋蔵文化財調査報告書第48集 池端城跡発掘調査報告書、同第50集 藤塚遺跡Ⅲ、同第51集 寺中遺跡・中屋敷遺跡Ⅱ、同第52集 坪の内遺跡、同第53集 丹正坊遺跡Ⅱ、同第54集 市内遺跡発掘調査報告書1995、同第55集 番屋前遺跡群、同第56集 長土呂遺跡群、同第57集 高師町遺跡群
王滝村教育委員会	王滝村の文化財No.5 大岩橋
中郷村教育委員会	籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺構編
水見市教育委員会	水見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅳ 水見市埋蔵文化財調査報告書第23冊
大門町教育委員会	大門町埋蔵文化財調査報告第8集 布目沢北遺跡第3次調査、同第10集 本江畑田Ⅰ遺跡発掘調査報告、同第11集 二口遺跡発掘調査報告、同第12集 大門町東部地区埋蔵文化財発掘調査報告
下村教育委員会	下村埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 下村加茂遺跡発掘調査報告書
小松市教育委員会	念仏林南遺跡Ⅱ
加賀市教育委員会	加賀市埋蔵文化財報告書第33集 小塩辻モチ山製炭窯跡、同第35集 山代再興九谷窯跡
清水町教育委員会	清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 小羽山
今立町教育委員会	今立町埋蔵文化財調査報告第4集 戸板山古墳群Ⅱ
岐阜市教育委員会	(財)岐阜市教育文化振興事業団報告書第1集 堀田・城之内Ⅱ、平成8年度 岐阜市市内遺跡発掘調査報告書
笠岡市教育委員会	笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告3 関戸廃寺
袋井市教育委員会	袋井市考古学資料集第3集 八幡山横穴群、鶴松遺跡Ⅷ、石原沢遺跡Ⅰ・Ⅱ
豊橋市教育委員会	豊橋市埋蔵文化財調査報告書第20集 市道遺跡(Ⅰ)、同第33集 公文遺跡(Ⅲ)・牟呂城址、同第34集 大西遺跡、同第35集 権現山、同第36集 水神貝塚
安濃町教育委員会	安濃町埋蔵文化財発掘調査報告書12 多倉田遺跡発掘調査報告書
草津市教育委員会	草津市文化財調査報告書28 草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書(XⅠ)
八日市市教育委員会	八日市市文化財調査報告18 永田遺跡・下羽田遺跡発掘調査報告書
岸和田市教育委員会	岸和田市文化財調査概要22 平成8年度発掘調査概要
河内長野市教育委員会	河内長野市文化財調査報告書第28輯 河内長野市埋蔵文化財調査報告書XⅢ、高向神社本殿保存修理報告書
高石市教育委員会	高石市文化財発掘調査概要1996-1 大園遺跡他の発掘調査概要
豊中市教育委員会	豊中市埋蔵文化財年報Vol.4、豊中市文化財調査報告書第36集 蛍池北遺跡第12次発掘調査報告書

	掘調査報告、同第39集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要平成8(1996)年度、同第40集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要平成7(1995)年度
八尾市教育委員会	八尾市文化財調査報告36 八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告Ⅰ、同37 八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告Ⅱ
貝塚市教育委員会	貝塚市埋蔵文化財調査報告第40集 貝塚市遺跡群発掘調査概要19、同第41集 沢新開遺跡発掘調査概要、同第42集 加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要
藤井寺市教育委員会	石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅱ 藤井寺市文化財報告第15集
枚方市教育委員会	枚方市文化財調査報告第31集 枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1996、平成6年度 市民歴史講座 淀川流域の交通史、枚方市立旧田中家鋳物民俗資料館
羽曳野市教育委員会	古市遺跡群Ⅷ 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書34
神戸市教育委員会	平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報、同平成6年度、魚崎中町遺跡(第3次調査)、特別展 福原京とその時代
龍野市教育委員会	龍野市文化財調査報告17 南山古墳群・南山高屋遺跡
姫路市教育委員会	T S U B O H O R I 平成7年度(1995)姫路市埋蔵文化財調査略報
三田市教育委員会	さんだのいせき 三田文化財情報平成8年度合冊号
赤穂市教育委員会	赤穂市文化財調査報告書42 津村古墳、同45 東有年・沖田遺跡発掘調査報告書
加西市教育委員会	加西市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表
竹野町教育委員会	竹野町文化財調査報告書第11集 見蔵岡遺跡 その二
津名町教育委員会	津名町埋蔵文化財調査報告書第1集 津名町遺跡分布図
中町教育委員会	中町文化財報告12 坂本・観音谷遺跡、同13 段ノ城遺跡、同14 菟花・土井の後遺跡
加美町教育委員会	加美町文化財報告1 市原・寺ノ下遺跡
八鹿町教育委員会	八鹿町ふるさとシリーズ第9集 風と街と私たち、同第10集 名草神社三重塔と出雲大社、兵庫県八鹿町文化財調査報告書第13集 浅間西山古墳群
氷上郡教育委員会	氷上郡埋蔵文化財調査概要報告書Ⅰ、氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書4
御所市教育委員会	室宮山古墳範囲確認調査報告 御所市文化財調査報告書第20集
大和郡山市教育委員会	大和郡山市文化財調査概要36 郡山城35次発掘調査報告、同37 寛政十一年瓦屋兵助作銘鯨瓦調査報告
岩出町教育委員会	平成7年度 岩出町内遺跡発掘調査概要、同平成8年度
倉吉市教育委員会	倉吉市文化財調査報告書第84集 夏谷遺跡発掘調査報告書、同第85集 不入岡遺跡群発掘調査報告書、同第86集 横谷遺跡群発掘調査報告書、同第87集 倉吉市内遺跡分布調査報告書Ⅸ、同第88集 下張坪遺跡発掘調査報告書、同第89集 両長谷遺跡発掘調査報告書、同第90集 下西野遺跡発掘調査報告書、同第91集 円谷城跡発掘調査報告書
北条町教育委員会	北条町埋蔵文化財報告書21 町内遺跡発掘調査報告書第6集、同22 曲遺跡群発掘調査報告書2、同23 北尾23号墳発掘調査報告書
大社町教育委員会	ひろげ遺跡
岡山市教育委員会	吉野口遺跡発掘調査報告
久世町教育委員会	久世町埋蔵文化財発掘調査報告2 五反廃寺
広島県教育委員会	広島県埋蔵文化財保護行政資料7 広島県の埋蔵文化財、同8 広島県の埋蔵文化財、中世城館遺跡保存整備事業発掘調査報告7 吉川元春館跡
府中市教育委員会	府中市内遺跡3 府中市埋蔵文化財調査報告第8冊
佐川町教育委員会	佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 上美都岐遺跡
福岡県教育委員会	大宰府史跡 平成8年度発掘調査概報、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告43 クリナラ遺跡・若宮遺跡、同44 笹隈遺跡、同45 志波桑ノ本遺跡、同46 宮原遺跡Ⅲ、同47 西法寺遺跡・経塚遺跡、徳永川ノ上遺跡Ⅲ、ウツケ畑遺跡・桑野遺跡、金居塚遺跡、以来尺遺跡Ⅰ、上唐原稲本屋敷遺跡、福岡県文化財調査報告書第127集 塚崎東畑遺跡、同第128集 毘沙門遺跡、同第129集 下高橋馬屋元遺跡、同第130集 堅粕遺跡群、同第131集 君畑遺跡Ⅱ、福岡県埋蔵文化財発掘調査年報 平成6年度
久留米市教育委員会	久留米市文化財要覧、西行古墳群 久留米市文化財調査報告書第84集、神道遺跡第16次調査 同第103集、呉服町遺跡 同第104集、不光院遺跡 同第105集、二本木遺跡第

	10次調査 同第106集、白口西屋敷遺跡 同第107集、国寺遺跡第5次調査 同第108集、道蔵遺跡 同第109集、平成7年度久留米市内遺跡群 同第110集、上津・藤光遺跡群 同第111集、大善寺北部地区遺跡群V 同第112集、筑後国府跡 同第113集、安武地区遺跡群X 同第114集、へボノ木遺跡平成7年度発掘調査概要 同第115集、津福寺山遺跡 同第117集、城崎遺跡第2次調査 同第118集、日出原南遺跡第2次調査 同第119集、筑後国府跡第140次調査発掘調査概要 同第120集、へボノ木遺跡第62次調査 同第121集、へボノ木遺跡第63次調査 同第122集、久留米城下町魚屋町遺跡第1・2次調査 同第123集、久留米城外郭遺跡第2次調査 松田家屋敷跡 同第124集、平成8年度へボノ木遺跡 同第125集、筑後国府跡平成8年度発掘調査概要 同第126集、平成8年度久留米市内遺跡群 同第127集、安武地区遺跡群XI 同第128集、大善寺北部地区遺跡群VI 同第129集、上津・藤光遺跡群 同第130集
八女市教育委員会	八女市文化財調査報告書第37集 松本遺跡、同第38集 埋蔵文化財調査概報Ⅱ、同第39集 本町遺跡、同第40集 八女南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報6、同第41集 八女東部地区埋蔵文化財調査概報1、同第42集 埋蔵文化財調査概報Ⅲ、同第43集 八女南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報7、同第44集 室岡工業団地内遺跡Ⅲ、同第45集 八女東部地区埋蔵文化財発掘調査概報2、同第46集 犬尾城跡、同第47集 八女東部地区埋蔵文化財発掘調査概報3、同第48集 埋蔵文化財調査概報Ⅳ、同第49集 熊野遺跡2、同第50集 一竿遺跡
大野城市教育委員会	大野城市文化財調査報告書第47集 石勺遺跡Ⅰ、同第48集 御陵前ノ椽遺跡、同第49集 牛頸石坂窯跡、同第50集 石勺遺跡Ⅱ
大川市教育委員会	大川市文化財調査報告書第4集 西新開遺跡、同第5集 郷原北田遺跡
北九州市教育委員会	北九州市文化財調査報告書第71集 能行遺跡、同第72集 小倉城跡Ⅲ
行橋市教育委員会	椿市廃寺Ⅱ 行橋市文化財調査報告書第24集、福丸古墳群 同第25集
稲築町教育委員会	次郎太郎古墳群 稲築町文化財調査報告書第4集
三潞町教育委員会	三潞町文化財調査報告書第4集 西牟田嬉野遺跡、同第5集 田川大野遺跡
新吉富村教育委員会	大ノ瀬下大坪遺跡 新吉富村文化財調査報告書第10集
唐津市教育委員会	唐津市埋蔵文化財調査報告書第74集 唐ノ川遺跡群、同第75集 八幡溜第Ⅱ遺跡(Ⅰ)、同第77集 千々賀古園遺跡(Ⅱ)、同第78集 佐志中通遺跡、同第79集 菅牟田西山遺跡・山田団六遺跡
鎮西町教育委員会	鎮西町文化財報告書第14集 No.27氏家行広陣跡
玄海町教育委員会	玄海町文化財調査報告書第4集 長倉遺跡、同第5集 池尻海底遺跡
熊本市教育委員会	池辺寺跡Ⅰ
五木村教育委員会	五木村文化財調査報告第2集 頭地C遺跡、同第3集 頭地田口B遺跡
犬飼町教育委員会	下野遺跡・上津尾遺跡
宮崎市教育委員会	車坂・山下遺跡群
串間市教育委員会	串間市文化財調査報告書第16集 市内遺跡発掘調査報告書
岩手県立博物館	岩手県立博物館研究報告 第14号、岩手県立博物館調査研究報告書第13冊 丹内Ⅰ遺跡発掘調査報告書
北上市立博物館	北上市立博物館研究報告書 第11号
(社)日本金属学会附属金属博物館	金属博物館紀要 第27号
秋田県立博物館	企画展 よみがえる縄文ファッション、研究報告 第22号
上高津貝塚ふるさと歴史の広場	要覧、年報 第1、2号、国指定史跡上高津貝塚整備事業報告書、土浦城(外丸御殿跡)発掘調査報告書、六十原A遺跡、柳沢遺跡・養老田遺跡・寿行地北遺跡、土浦市養老田遺跡
栃木県立博物館	栃木県立博物館研究紀要 第14号、第60回企画展 明治天皇と御巡幸
群馬県立歴史博物館	紀要 第18号、第56回企画展 藤原道長の遺産
埼玉県立さきたま資料館	調査研究報告 第10号、将軍山古墳 史跡埼玉古墳群整備事業報告書
国立歴史民俗博物館	平成9年度 要覧

千葉県立中央博物館 出光美術館 大田区立郷土博物館	千葉県立中央博物館研究報告—人文科学—第5巻第1号 出光美術館 館報第98号 紀要 第7号 1996年度、大昔の大田区 原始・古代の遺跡ガイドブック、特別展 ミクロネシア
調布市郷土博物館 横浜市歴史博物館 小田原市郷土文化館 平塚市博物館 茅ヶ崎市文化資料館 長野県立歴史館 松本市立考古博物館	埋蔵文化財年報 平成6、7年度 年報(平成6年・7年度版) 小田原市郷土文化館研究報告No.33(人文科学No.17) 平塚市博物館年報 第20号、平塚市博物館研究報告 自然と文化第20号 文化資料館調査研究報告5 長野県立歴史館研究紀要 第3号 松本市文化財調査報告No.124 松本市竹淵遺跡Ⅱ、同No.126 小池遺跡Ⅱ・一ツ家遺跡、同No.127 エリ穴遺跡、同No.128 松本市県町遺跡XⅠ、同No.129 松本城下町跡NKH(長岡市立科学博物館報)No.71、研究報告 第32号、縄文時代の信仰 科学博物館資料シリーズNo.7、縄文土器 同No.8
長岡市立科学博物館 氷見市立博物館	平成8年度 氷見市立博物館年報第15号、氷見市近世史料集成第19冊 陸田家文書その四
三方町立郷土資料館 土岐市美濃陶磁歴史館	三方町文化財調査報告書第16集 国指定天然記念物常神のソテツ 特別展 洛中 桃山のやきもの、柿野1号窯跡発掘調査報告書、大草遺跡発掘調査報告書
沼津市歴史民俗資料館 半田市立博物館 齋宮歴史博物館 滋賀県立安土城考古博物館	沼津市博物館紀要21 研究紀要 No.18、年報 平成8年度 企画展 王朝・いんてりあ図鑑 平成9年度春季特別展開館五周年記念 物と人、第14回企画展 館蔵歴史資料展、平成8年度年報、紀要第5号
大阪城天守閣 大阪府立弥生文化博物館 大阪市立博物館 吹田市立博物館	秀吉と桃山文化、大阪城天守閣紀要 第24号 平成9年春季特別展 青銅の弥生都市 大阪市立博物館報 No.35、36、大阪市立博物館研究紀要 第28、29冊 平成9年度特別展 達磨窯、平成8年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報 蔵人遺跡・吹田城跡推定地・垂水遺跡・高浜遺跡・高畑遺跡、平成8年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報 蔵人遺跡・垂水遺跡・片山芝田遺跡
大東市立歴史民俗資料館 八尾市立歴史民俗資料館 茨木市立文化財資料館 太子町立竹内街道歴史資料館 西脇市郷土資料館 和歌山県立紀伊風土記の丘資料館 鳥取県立博物館 山陽町郷土資料館 広島県立歴史博物館 下関市立考古博物館 徳島県立博物館 藤山歴史資料館 佐賀県立九州陶磁文化館 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 ミュージアム知覧	大東市埋蔵文化財調査報告第11集 中垣内遺跡発掘調査報告書 古文書・絵図にみる近世の常光寺、研究紀要 第8号 平成8年度発掘調査概報 館報(第3号) 西脇市文化財調査報告6 野村構居遺跡Ⅱ 平成7年度紀伊風土記の丘年報 第23号、特別展 石棚と石梁 郷土と博物館 通巻81~84号 南方前池遺跡 草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ 研究紀要 第1号、年報2 平成8年度 辰砂生産遺跡の調査 藤山歴史資料館展示案内1997 年報 平成7年度 No.15 年報 平成8年度、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第19集 六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅴ 民俗文化財調査事業報告書「薩摩の水からくり」、知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 西垂水(山薙)遺跡、館報 第3号、紀要 第3号
東北大学埋蔵文化財調査研究センター	東北大学埋蔵文化財調査年報8

筑波大学歴史・人類学系
 千葉大学文学部考古学研究室
 東京大学埋蔵文化財調査室
 東京都立大学人文学部考古学研究室
 東洋大学文学部史学科研究室
 早稲田大学第一文学部
 早稲田大学文学部考古学研究室
 早稲田大学本庄校地文化財調査室
 東海大学校地内遺跡調査団
 名古屋大学文学部考古学研究室
 滋賀県立大学人間文化学部
 大阪大学文学部考古学研究室
 大手前女子大学史学研究室文化財調査室
 奈良大学文学部文化財学科
 広島大学文学部帝釈遺跡群発掘調査室
 九州大学文学部考古学研究室
 熊本大学文学部考古学研究室
 別府大学附属博物館
 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

北網圏北見文化センター
 日本窯業史研究所

都内遺跡調査会
 葛飾区遺跡調査会

文京区遺跡調査会
 池之端七軒町遺跡調査会
 十条久保遺跡調査会
 都立学校遺跡調査会
 府中病院内遺跡調査会
 落川・一の宮遺跡(日野3・2・7号線)調査会
 日本考古学協会
 国立国会図書館
 (株)講談社
 (株)草思社
 (株)名著出版
 雄山閣出版(株)
 玉川文化財研究所

浜松市埋蔵文化財調査事務所
 上野市遺跡調査会

歴史人類 第25号
 大寺山洞穴第5次発掘調査概報
 東京大学構内遺跡調査研究年報1 1996年度
 東京都立大学考古学報告1 真人原遺跡Ⅱ、人類誌集報1997

白山史学 第32号、東洋大学文学部紀要第50集 史学科篇第22号
 古代 第103号
 館石野Ⅰ遺跡発掘調査報告書
 下戸塚遺跡の調査 第4部
 東海大学校地内遺跡調査団報告7、水尻遺跡
 名古屋大学文学部研究論集128 史学43、考古資料ソフトウェア写真集 第12集
 人間文化2号 滋賀県立大学人間文化学部研究報告2号
 井ノ内稲荷塚古墳Ⅱ 第4次発掘調査概報
 有岡城跡・伊丹郷町Ⅴ

文化財学報 第15集
 帝釈遺跡群発掘調査室年報ⅩⅠ

東アジアにおける支石墓の総合的研究
 先史学・考古学論究Ⅱ、熊本大学埋蔵文化財調査室年報3 1996年度
 天平の宇佐
 鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報11

川東13遺跡
 日本窯業史研究所報告第46冊 殿山遺跡Ⅰ、同第50冊 鷲ヶ峰遺跡 北東地区第1次調査報告書、同第51冊 鷲ヶ峰遺跡 北東地区第2次調査報告書
 溜池遺跡、駒込鯉縄手 御先手組屋敷
 平成5・6年度 葛飾区埋蔵文化財調査年報、葛飾区遺跡調査会報告第38集 柴又河川敷遺跡Ⅲ
 文京区埋蔵文化財調査報告書第10集 春日町遺跡Ⅴ地点
 池之端七軒町遺跡(慶安寺跡)
 十条久保遺跡発掘調査概報
 富士見台Ⅱ、日性寺B遺跡、都小石川(Ⅰ近世・近代遺構編) 駕籠町遺跡
 武蔵台遺跡Ⅱ
 落川・一の宮遺跡調査略報Ⅴ 1996年の調査

日本考古学年報48(1995年度版)、日本考古学 第3号
 日本全国書誌 第24号(通号2133号)
 歴史発掘① 瓦を読む
 日本人はどのように建造物をつくってきたか8 京都千二百年(上)
 地方史研究 第367号
 考古学による日本歴史10 対外交渉
 久野北側下遺跡Ⅲ地点発掘調査報告書、大蔵東原遺跡第7・8次発掘調査報告書、飯山畠中遺跡発掘調査報告書、川坂遺跡(西川坂1684-1地区)発掘調査報告書、石川稲荷山遺跡発掘調査報告書、野庭町永作遺跡(日野住宅造成工事地区)発掘調査報告書、宿根北遺跡発掘調査報告書
 城山遺跡Ⅵ、鳥居松遺跡、木伐田遺跡、下滝遺跡群
 上野市埋蔵文化財年報3(1996年度)、上野市文化財調査報告59 追越遺跡発掘調査報告、同60 上野城跡調査報告

(財)古代学協会	古代文化 第49巻第5～7号、古代学研究所研究紀要 第6輯
(財)泉屋博古館	泉屋博古館紀要 第十三巻
名神高速道路内遺跡調査会	名神高速道路内遺跡調査会報告書第2輯 伝待宵小侍従墓・源吾山古墳群
郵政考古学会	郵政考古紀要23
六甲山麓遺跡調査会	旧金剛寺跡-E地区を中心とする調査一
尼崎市立文化財収蔵庫	尼崎市文化財調査報告第25集 道ノ下遺跡(第7次)
(財)黒川古文化研究所	第77回展覧 よみがえる甕、第79回展覧 鏡
奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財研究所史料第46冊 山内清男考古資料8、年報 1996、平城宮発掘調査出土木簡概報(32)、官営工房研究会会報4
同研究所埋蔵文化財センター	信仰関連遺跡調査課程、古代都城制研究会第2回報告書 都城における行政機構の成立と展開
大和弥生文化の会	みずほ 合冊 第11号～第15号
(財)高野山文化財保存会	普賢陽四脚門ほか二棟修理工事報告書
津山弥生の里文化財センター	津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第58集 西吉田北遺跡、同第59集 有本古墳群、同第60集 日上天王山古墳、同第61集 永見屋敷跡、年報 津山弥生の里第4号(平成7年度)
博物館等建設推進九州会議・編集委員会	文明のクロスロード Museum Kyushu 季刊第15巻・第1号 通巻55号
(財)京都市埋蔵文化財研究所	平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要
京都市埋蔵文化財調査センター	京都市内遺跡発掘調査概報 平成8年度、京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度、京都市内遺跡試掘調査概報 平成8年度
(財)向日市埋蔵文化財センター	向日市埋蔵文化財調査報告書第42集 物集女城跡、同第44集、年報 都城8、ふるさと文庫1 むこうまち往来こばなし、市制25周年記念特別展“長岡京めしあがれ”
(財)長岡京市埋蔵文化財センター	年報 平成7年度
京都府教育委員会	埋蔵文化財発掘調査概報(1997)、曼殊院 本堂・書院・庫裏修理工事報告書、竜谷大学本館並びに附守衛所保存修理工事報告書、相国寺本堂(法堂)・附玄閣廊修理工事報告書、京都の文化財(第14集)
大宮町教育委員会	京都府大宮町文化財調査報告書第9集 左坂南古墳群発掘調査概報、同第10集 小中野遺跡発掘調査概報、同第11集 左坂古墳群F支群平成8年度発掘調査概報
福知山市教育委員会	福知山市文化財報告書第33集 平成8年度埋蔵文化財発掘調査概報、同第34集 牧正一古墳
八木町立中央公民館	京都府船井郡八木町文化財調査報告第3集 八木町遺跡地図
長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書 第36冊、井ノ内稲荷塚古墳Ⅱ 同第37冊
宇治市教育委員会	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第32集、同第36集 東屋観音発掘調査概報、同第37集 白川金色院跡発掘調査概報平成8年度調査
京田辺市教育委員会	魚田遺跡第1次・第2次発掘調査概報 田辺町埋蔵文化財調査報告書第22集
山城町教育委員会	京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第17集 椿井大塚山古墳第4次調査、同第18集 椿井大塚山古墳第5次調査
京都国立博物館	平成7年度 京都国立博物館年報
京都府立山城郷土資料館	展示図録24 柿洪の力、山城郷土資料館報 第14号
京都府立総合資料館	資料館紀要 第25号
京都市歴史資料館	京都市の文化財 第9回
亀岡市文化資料館	第13回特別展 情報の発信・受信、それは道、第23回企画展 亀岡の宝物
向日市文化資料館	向日市古文書調査報告書第6集 京都府向日市寺戸区有文書調査報告書
城陽市歴史民俗資料館	市制25周年記念夏季企画展 木津川と流れ橋
京都大学総合博物館	京都大学総合博物館春季企画展 王者の武装
同志社大学歴史資料館	上京・西大路町遺跡桜の御所隣接地点の発掘
両丹考古学研究会	浪江庸二先生・林和廣先生追悼 太邇波考古学論集
精華町の自然と歴史を学ぶ会	波布理曾能 第14号

賀川光夫
梶 國男
小池 寛
土橋 誠
樋口隆康
水野正好
遊佐和敏

漢魏鏡の伝播
多摩考古 第27号
出土銭貨 第7号
古代の日本と渡来の文化
中国・美の粹 中国歴史博物館名品展、海獣葡萄鏡の研究
奈良大学考古学研究室調査報告書第14集 五村遺跡
東邦考古第21号

編集後記

情報65号が完成しましたので、お届けします。

本号は、職員の研究論文と、昨年度事業のうちで、特に調査成果のあった舞鶴市浦入遺跡と、八幡市内里八丁遺跡の抄報を中心に掲載いたしました。中でも、研究論文の方は、上・下二回に分けて掲載する予定ですので、後編の方もご期待下さい。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第65号

平成9年9月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER